ねー

小野　晃太朗

登場人物

寧　女性
父神　寧の父
母神　寧の母
心（しん）男性　教室の生徒
先生　男性　教室の先生
紋白　女性　教室の生徒
花　女性　教室の生徒
兜　男性　元教室の生徒
鍬形　男性　元教室の生徒

脱獄王　女性　四王の一人
発明王　女性　四王の一人
雑学王　女性　四王の一人
剽窃王　女性　四王の一人

警官　本当は一人ひとり名前がある
虫　男性　性犯罪者ハンター
藁　女性　非合法な仕事依頼所兼斡旋所の窓口

水掛男1、2、3、4、5、6　幻覚を見る連続婦女暴行犯
弁護士　プロの弁護士
医者　産婦人科医だったり精神科医だったり
宿屋　ラブホテルの運営、犯罪者とグル、盗撮マニア

右心房　私刑団ハートブレイカーズの構成員
左心房　私刑団ハートブレイカーズの構成員
右心室　私刑団ハートブレイカーズの構成員
左心室　私刑団ハートブレイカーズの構成員

麒麟　政治的秘密結社話し合いの構成員
榊　政治的秘密結社話し合いの構成員
岩戸　政治的秘密結社話し合いの構成員
思兼　政治的秘密結社話し合いの構成員
真の思兼　名前を取り戻した神

【場所】

都市のあらゆるところ

曖昧な場所。現実にあるかもしれない。
板張りの舞台の床から覗くようにして、花が生えていたり、
街灯が立っていたりする。それと、小さい小箱の山も。

薄い暗闇の中、女の子が一人入ってくる。名前は寧。
きっとこれは悪い夢だ。
彼女はゆっくり歩く。気配を感じて立ち止まり、闇の奥を見つめる。
足を擦る音が聞こえて動けない。
暗闇の中から、筋骨隆々のふたりの水掛男がゆっくり出てくる。
寧は動けない。足が動かない、腰が落ちる、そのまま身を小さくする。
水掛男二人はじょうろで寧に水をかけ続ける。

水掛男たちは寧の口にテープを貼り、寧の頭をなでたあと、消えていく。
寧は出て行こうとするが、宿屋が出てきて制止される。寧は財布を出すが、お金がない。
電話をかけて、ひとを呼ぶ。
父神と母神が現れて、父神が金を出す。母神はタオルを寧に差し出す。

そのあいだに、テーブルと椅子がたくさん用意されている。
テーブルの上で先生と心が紙相撲で戦っている。

先生　こうやって、戦うのはいいよ。
心　はあ。
先生　君は、この力士になにか、名前をつけた？
心　武蔵丸。
先生　ふーん。

心　先生は。
先生　ドルジ。
心　へえ。

寧は父神に頬を叩かれる。

先生　勝負は時の運だよ。
心　じゃあ、先生は次、ドルジになにを乗せますか。
先生　賭け事はしないんだ。
心　どうしてですか。
先生　僕は賭けごとに弱い。
心　試してみましょう。
先生　やだよ。
心　今までに何か、賭けてみたことはあるんですか。
先生　それなりに。
心　どういうものを賭けていたんですか。
先生　それは言えない。
心　じゃあ、次に僕が勝ったら、それを教えてくれるっていうのはどうですか。
先生　言ってるでしょ、賭けはしない。
心　つまらない。
先生　つまらなくて結構。
心　賭けに勝ったことはないんですか。
先生　うーん、どうだろう。
心　なんですか。
先生　何でもないよ。

心　言ってくださいよ。
先生　嫌だね。

紋白が枡ぐらいの大きさの箱を手に持って入ってくる。

紋白　ただいま。
心　おかえりなさい。
先生　おかえり。（表情を見る）どうしたの、何かあった？
紋白　ええ。
先生　紋白、それは？
紋白　揚羽です。
先生　揚羽？　ほんとかい？
紋白　はい。
先生　どこで？
紋白　ここへ帰る途中、届けてくれる人がいました。
先生　その人は、なにか言ってた？
紋白　いえ。
先生　そうか。
紋白　あの、私、なんて言ったらいいか。
先生　うん、うん、少し話そう。心、お茶を入れてくれないか。
心　はい。
先生　花はどこ？
紋白　下の畑にいます。
先生　分かった、ちょっと呼んでくるよ。
心　おかえり。揚羽。

先生　おかえり。
紋白　おかえり。

紋白は箱を、箱の山に積む。

心はじっと掌を見ている。

椅子に座った寧は、父神と母神の話を聞く。まるで教室みたいだ。

父神　まったく情けない。
寧　（テープを貼られて言えない）ごめんなさい。
母神　体の方は大丈夫ですか？
寧　（テープを貼られて言えない）いまのところ、大丈夫です。薬も飲みました。
父神　ちゃんと抵抗したのか。
寧　（テープを貼られて言えない）できませんでした。
父神　どうして自分を大事にできないんだ（寧をはたく）
母神　ちょっとお父さん。
父神　お前も、なんか言ってやれ。
母神　生きていてくれたことが嬉しい。あなたが生きててよかった。本当に良かった。生命があってよかった。あなたはたった一人の娘なのよ。（寧を抱きしめる）

父神はその場を離れる。

父神は電話をかける。母神も電話をかける。

心と紋白は先生と椅子に座って話している。
少し離れて、花という女の子が座って見ている。みんな、お茶を飲んでいる。

先生　あと、たよりのないのは、兜と鍬形だけだ。
心　僕は、少し覚えています。
紋白　どういう人達？
心　怖い顔をしているけど、優しい人たちだよ。
先生　優しい顔をしていたんだよ。でも、ここからいなくなる前かな、ずっと怒っていた。
心　何に対して？
先生　あらゆること。
紋白　あらゆること？
先生　そう。山の下で暮らしてみると、分かると思うよ。
紋白　どういうものなんですかね。
心　気が向いたら、夏の間、ちょっと働きに出てみるといいよ。
紋白　怖いな。
心　大丈夫。ちゃんと楽しいこともあるよ。
紋白　そう。
花　虫は？
先生　もう、この世のものではないと思っている。
花　勝手に殺さないでよ。
先生　ごめん、そういう意味じゃないんだ。
心　どういう意味ですか。
先生　いつか、話してあげるよ。
心　待っています。
先生　僕らはいま、命があることを喜ぼう。

心　（頬杖をつく）

紋白　みんな、いい人だった。

花　そうかな。

紋白　私はそうだと思う。

花　いい人も悪い人もいない、いいことも悪いこともした、ただの人間がいるだけ。そういう人たちと沢山話をした。私はそういう時間が好きだった。

先生　勉強をするって、そういうことだよ。

心　どういうことですか？

先生　なにかを調べたり、試したり、深めていくことは、自分のなかにものを受け入れる容量を増やすことだ。ものを受け入れる容量っていうのは、なにかを愛することぐらいしか使いみちがない。（間）だから、学問はなんの役にも立たない。（間。みんなの顔をじっと見る）

紋白　ごめん、私。

花　いいや、いまのは私の言い方が悪かった。紋白、ごめんね。

紋白　ううん。

花　私、あなたのこと、好きだよ。

紋白　全部はっきり言うんだね。

花　言えるうちに言うよ。

先生　それじゃ、僕はそろそろ。おやすみ。

花　あ、私も。

紋白　おやすみなさい。

心　おやすみなさい。

花　おやすみ。

先生はその場を去る。心と紋と花はその場に残る。

心　（間。紋白が立ち上がろうとする気配を感じて制するように）紋白。
紋白　なに。
心　僕、話し合いに呼ばれた。
紋白　え。話し合いって、あの、話し合い？
心　うん。
紋白　どうして。
心　わからない。
紋白　いつ。
心　ちょっと前、道を歩いていたら声をかけられた。
紋白　先生には？
心　言ってない。
紋白　どうして？
心　巻き込みたくない。
紋白　なんで？
心　わからない。理解のできないような、大きな力が働いている気がする。
紋白　だったら。
心　好きなんだよ。あのひとが。
紋白　うん。
心　今は、君にしか、話せない。
紋白　花は？
心　きっと全力で止めにかかると思う。
紋白　それは花をなめてるよ。
心　そうかな？
紋白　私はそう思う。
心　そっか。そうかもしれない。

紋白　私も先生のことが好き。心のことも、花のことも。
心　うん。
紋白　抱えきれなくなったら、話してしまったほうがいいと思う。
心　そのうちね。
紋白　大きな荷物を抱えて、苦しい思いをしているのに、誰にも言えないって、とてもつらいことだと思う。
心　わかってる。
紋白　見ている方も。
心　うん。
紋白　結局あなた次第なんだけどね。
心　まあね。
紋白　先生がどういう人か、わかってるでしょ？
心　（紋白を見る）
紋白　話してくれてありがとう。
心　ううん。聞いてくれてありがとう。
紋白　おやすみなさい。
心　おやすみ。

藁という名前の女が絨毯の上に座っている。
父神は立ち尽くしている。

父神　あんたが藁か。
藁　そうだよ。
父神　ここで合っているんだよな。
藁　なにが？
父神　頼みたいことがある。

藁　（制す）あなたは困ってるの？
父神　そうだ、藁にもすがりたい。（合言葉）
藁　よし、要件を聞こう。
父神　娘に無理やり水をかけた男たちを探してる。
藁　見つけてどうする？
父神　殺す。
藁　何を捧げる。
父神　この右手を。
藁　分かった。
父神　左手で殺す。
藁　落ち着きなよ。
父神　左手でじっくり殺す。
藁　分かった。分かったら、落ち着くんだ。
父神　はい。
藁　人を紹介する。
父神　どんな奴だ。
藁　性犯罪者専門の狩人。
父神　どんな奴だ。若い奴か。
藁　やばい奴だ。そして若い。
父神　男か？　それとも女か。
藁　男。どうしてそんなことを聞くの。
父神　初めてなんで。
藁　そう。
父神　なんて奴だ。
藁　名前は虫。

父神　虫？

藁　今からここに呼ぶ。

父神　わかった。右手はいつ渡せばいい。

藁　渡さなくていい。

父神　いいのか。

藁　いい。

父神　なぜ。

藁　いらない。

父神　え？

藁　私は性犯罪者がこの世で一番嫌いだ。ひとり残らず消えればいいと思っている。謝礼や代償や取引は何もいらない。奪われたものは何も戻らない。世の中のマイナスがマイナスになるだけだ。だから取引が成立しない。奪われた。急に、誰かの気まぐれで、いつもの時間と、当たり前のものが。

父神　その言葉、娘に聞かせてやりたい。

藁　直接言ってあげなよ。あなたが。

父神　（沈黙）

藁　だから、これはボランティアだ。

父神　でも、それでいいのか。

藁　じゃあ、他の仕事を持ってきてよ。

父神　なるほど。

父神は椅子を勧められて、祈るように腕と足を組んで座る。

母神と寧が、先生に挨拶をしている。

母神　よろしくお願いいたします。寧、挨拶なさい。

寧　（お辞儀をする）
先生　よろしく。
寧　（頷く）
母神　寧、あなたは勉強をしたほうがいい。いろんな目線を身につけること、違う角度からものを見ること。私とお父さんはあなたより先に死んでしまう。だから、あなたは勉強をして、自分を守ったり、戦ったりする方法を学ぶのがいいと思う。今は私達、できなかったことが、できるようになってきているの。でも、まだ間違ったまま変わらないこともたくさんある。苦しいこともきっとたくさんある。だからね、悲しかったり、辛かったり、苦しいこと、一人ではどうしようもないことがあれば、いつでも帰ってきていいのよ。
寧　（頷く）
母神　あと、みなさんに迷惑をかけないこと。いいね。
寧　（頷く）
母神　では先生、寧のこと、頼みました。
先生　はい。

母神はお辞儀をすると、その場を去る。
先生は寧にゆっくり近づき、口のテープをはがす。

先生　寧、ようこそ。君を歓迎する。ここは教室。僕たちはお互いに先生で、生徒だ。間違うことがないように、お互いのことを見守っていて、一日に何回か自分の話をしてもらう。
寧　みんな、どういう話をするんですか。
先生　見つけたものの話だよ。
寧　見つけたもの？
先生　森の中で見つけた生き物、人と話して気づいたこと、山を下りて見たもの、心が震えたこと、いい映画、読んだ本、好きなこと、嫌いなこと、何でも良い。
寧　きまりごとはあるんですか。

先生　んー、特に。強いて言うなら、否定しないってことかな。
寧　今、やりませんか？
先生　え？
寧　私、みんなの話が聞きたい。
先生　すぐにじゃなくてもいいんだよ。
寧　ごめんなさい。
先生　謝らなくていい。
寧　ごめんなさい、癖なんです。
先生　今、君は自分のことで精一杯だと思うから、まずは毎日、食べて、眠って、そういうことを繰り返しできるようになってからでいいと思う。
寧　お願いします。何かをしていないと、どうにかなってしまいそうなんです。
先生　せっかちだね。（心と紋白と花を呼ぶ）まずはこの三人を紹介するよ。君と同じようにここにいる三人だ。
心　心です。
紋白　紋白といいます。
花　私は花。
寧　寧です。よろしくおねがいします。
十三人　よろしくおねがいします。
先生　三人とも、寧にここを案内してあげてほしい。
心　わかりました。
紋白　どこから来たの？
寧　港の見える丘の街。
紋白　そうなんだ、垢抜けてるね。（寧の匂いを嗅ぐ）寧って、いいにおいするね。
花　紋白、近い。ほら、怖がってるじゃない。
紋白　あ、ごめんね。
寧　（少し気分が悪くなる）ううん。

心　お互いのことは、あとでゆっくり話そう。
花　そうしよう。
紋白　うん。
寧　（ちょっと吐きそう）

四人はその場から去る。先生が残る。

父神と藁と、虫がいる。

虫　僕がやるよ。
父神　いや、あんたは見つけてくれるだけでいい。
虫　父親が殺しをするのは良くない。
父神　ちょっと思ってたのと違うな。
虫　なんですか。
父神　なんで、君等はちょっと優しいんだ。
虫　言ってる意味がわかんないです。
父神　いや、いまのは忘れてくれ。
虫　はあ。
父神　何でも良い、俺が殺す。
虫　考えろ。
父神　（息を吸った）
虫　ありとあらゆることを考えろ。父親が何をすべきか、子供は何を望んでいるのか。今自分はどこにいるのか、誰と話しているのか。すべて。
父神　（ちょっと考える）だめだ、さっぱりだ。（ちょっと笑う）
虫　（つられて笑う）

二人して笑う。

藁　で、どうするの。
虫　とりあえず、その男二人を僕は探します。それまでに、きちんと考えておいて下さい。
父神　はあ。
虫　考え抜いたから覚悟だと言い切れるんですよ。
父神　（一考し）一理ある。
虫　僕はやることをやります。
父神　頼む（虫の両手を握る）
虫　頼まれた。

虫は丁寧に父神の手を包むと、そっと去る。

父神　大丈夫かな。
藁　あなたが？
父神　違う。いや、そうかも。
藁　そう。
父神　落ち着かない。
藁　それは自分でなんとかしておくれ。

父神は去る。

先生のもとに、二人の男が訪ねてきている。兜と鍬形。

兜　先生。
鍬形　先生。
先生　あ、君たちは。
兜　お久しぶりです。
先生　生きていたのか。
鍬形　このとおりです。（五体満足を主張する）
先生　ちょっとまって、みんなを呼んで来よう。
兜　結構です。
先生　まあまあ、ゆっくりお茶でも飲んで行きなさい。少し話でも。
兜　はい。

兜と鍬形は促されるように椅子に腰掛ける。

先生　君たちには小さな椅子かもしれないが。
兜　いえ、（なんか言おうとする顔をするけど、言えない）
鍬形　早く座れよ。
兜　分かってる。（気がついて）あ、そうだ。
鍬形　だから座れよ。
兜　分かった。（座る）
鍬形　先生。（兜に促し、袋を出させる）
先生　なんだい。
兜　これ、少しばかりですが、足しにしてください。（小さな袋をテーブルの上に出す）
先生　君たちからは受け取れないよ。
鍬形　先生が今苦しいのは知っています。
先生　なかなか、隠し通せることでもないか。

鍬形　それに、僕たちのせいでもあるんです。
先生　何を言う。
兜　山を下りた人間がなんて言われているかご存知ですか。この小さな教室も。
先生　聞きたくないよ。
鍬形　人から何を言われてもいい、そう思っていました。だけど、最近はこう思うんです。貼られたレッテルは人を変えてしまう。傷つけば傷つくほど、そういう人間になってしまう。
先生　呪いだよ。
兜　ここにいる子たちは、幸せになってほしい。
先生　みんないい子たちなんだよ。
鍬形　先生が育てた人間は、みんないい人間です。
兜　でも、いい人間はみんな死んでしまう。
鍬形　これはみんなのためのお金です。
先生　だが、
兜　貧しいのは、お金に興味がないからだって言ってましたよね。
鍬形　あなたもそうだ。
先生　否定はしない。恥じ入るばかりだ。
鍬形　興味がないのは仕方がない、美しいものを探す必要がある。
兜　これもあなたの言葉です。
鍬形　受け取って下さい。
先生　（少し考える）申し訳ない。（受け取る）
鍬形　頭を下げないで下さい。
先生　君たちも苦しい思いをしているのに。
兜　苦しいのは皆、同じです。

心と紋白と寧と花はその様子をのぞき見ている。

街灯に明かりが灯ると、麒麟が立っている。
鈴を鳴らすと、どこからともなく、話し合いのメンバーが集まる。

榊　こんばんは。
麒麟　こんばんは。
岩戸　こんばんは。
麒麟　みんな揃ったね。
岩戸　思兼がいないよ。
榊　思兼は、きっかけを出したらすぐに来るよ。
麒麟　大丈夫。いつもどおり、うまくいくよ。
岩戸　そうだね、みんな、信じてるよ。
麒麟　それじゃあ、今日も話し合いを始めよう。
岩戸　脱獄王がまた脱獄した。
麒麟　僕がなんとかしよう。
榊　東の方で、またひとが集まっている。
岩戸　それは僕がなんとかしよう。

思兼がやってくる。

思兼　こんばんは、ごめんね、遅くなって。
麒麟　聞いてた時間通りだよ。
榊　大丈夫だった？
思兼　滞りなく。
榊　良かった、ありがとう。

思兼　いえいえ、話しに戻ろう。話は途中まで聞いてた。早速だけど、脱獄王の件、麒麟はどう対処する？

麒麟　罠を仕掛ける。あちこちに。それから、鼻の効くひとたちを差し向けるよ。

思兼　わかった。大丈夫そうだね。じゃあ、不当な集会の件、岩戸はどうする？

岩戸　警官をいっぱい送って、散らばってもらう。

榊　不満が出たら、ぼくがなんとかする。

思兼　わかった、榊になんとかしてもらおう。~~なんとかなりそう。~~じゃあみんな、信じてるからね。

話し合いの人々はお互いの手を握る。街灯が消える。

兜と鍬形と先生はお茶を飲んでいる。

先生　さっき、揚羽が帰ってきたんだよ。

兜　そうですか。

先生　彼女も箱になってしまった。

鍬形　でも、帰ってこれたんですね。

先生　うん、これで戦いに行った子はみんな帰ってきた。

兜　あとは、僕たち次第ってことですか。

鍬形　そうだね。

先生　話し合いに行った子たちは帰ってこない。みんな今も話し合いの中にいるのか、それとも

兜　先生。

鍬形　僕たちは先生に感謝しています。

先生　なんだよ、急に。

兜　いろいろなことを教えてくれた。

鍬形　たくさん遊んでくれましたね。

先生　いや、僕はなにも。

兜　あの時間があったから、今、頑張れています。
鍬形　先生は、僕たちを否定しなかった。
兜　信じてくれた。
先生　なんだよ、怖いな。
鍬形　これは、僕ら二人からです。（包みを先生に渡す、長い）
先生　今日のことは、一生忘れられないだろうな。
鍬形　何を言ってるんですか。
兜　開けてください。
先生　どれ。（包を開けると、中には傘が入っている）
鍬形　僕ら二人で作りました。
兜　いろんなものから、先生を守ってくれるように。
鍬形　祈りを込めました。

先生は、暫く傘を眺め、立ち上がる。傘を開くと、感謝の言葉を述べてから、一旦閉じる。その後一旦奥に引っ込んで、包みを二つ持ってくる

兜　先生。
先生　実はあるんだ、僕からも。
兜　なんですか。
鍬形　（包みごしに手触りを確かめる）なんだろう。
先生　開けてみて。

二つの包みを開けると、兜と鍬形のための靴が入っている。

兜　あ。

先生　君たちが帰ってくるように、願いをこめて。
鍬形　（絶句してる）
先生　なんだい。
鍬形　でも。
先生　でもじゃない。
兜　（立ち上がる）先生。
鍬形　（立ち上がる）先生。
先生　君たちまであんな姿になってしまったら、今度こそ立ち直れないような気がするんだ。
兜と鍬形　ありがとうございます。
先生　いいから座れよ。
兜と鍬形　はい。

兜と鍬形は座る。

心がその場に出ていく、紋白は制し切れず一緒に、ついでに寧と花もついていく。

心　兜さん、鍬形さん、お久しぶりです。
先生　（先生は席を立つ）ああ、心、申し訳ないな。話に夢中になってしまっていたよ。
心　いえ。
先生　この二人は兜と鍬形。昔、ここの生徒だった。あの子達は今、ここにいる子たちだ。
兜　久しぶりだね。
鍬形　君は、心か。
心　はい。
鍬形　大きくなったね。
心　いえ。

紋白　私は紋白です。はじめまして。
鍬形　はじめまして。
兜　はじめまして。
花　わたしは花です。はじめまして。お二人の話は先生から聞いています。
鍬形　そうか。はじめまして。
兜　はじめまして。なんの話をしたんですか？
先生　いい話だよ。
兜　君は？
先生　この子は、今日からここに来た。
寧　寧といいます。
兜　そうか。はじめまして。
鍬形　はじめまして。
寧　はじめまして。
心　実は、先生にお伝えしたいことがあります。僕のところに話し合いの誘いがきました。
先生　なんだって。
兜　少し、話を聞かせてもらえるかな。
心　はい。
花　（心に詰め寄る）なんて言った。
心　話し合いの誘いが来た。
花　いつ。
心　結構前になる。
花　どうしてすぐに言わなかった。
心　こうなるって、すぐに思い浮かんだ。
先生　やめなさい。心、僕を見て。ゆっくり話してほしい。

水掛男二人が、歩いている。
スレッジハンマーを持った虫が近づいてくる。

虫　すいませーん。
水掛男１　（虫を見る）
虫　あの、すいません。ちょっといいですか。
水掛男２　だめです。
虫　すいません、すぐに終わるんで。
水掛男２　（水掛男１に）無視すんなよ。
水掛男１　やべーって、なんかきた。
虫　無視しないでください。
水掛男１　きたきた。
虫　あの、僕、虫っていうんですけど。

水掛男二人は小走りで逃げる、虫は二人を追っていく。

父神と母神は口論している。父神はなぜかぬいぐるみを片手に持ってる。

母神　あなたはわかってない。
父神　じゃあ、あなたは全部わかってるっていうんですね。
母神　そういうわけじゃない。
父神　俺がなんとかする。だから全部なんとかなる。
母神　人が、ひとりに対してできることなんてたかが知れてんのよ。
父神　あー、言いましたね。
母神　家を守ることと、家族を守ることと、人間一人の尊厳を取り戻すことは、別の問題だって言ってんの。

父神　はい、はい、そうですか。
母神　聞いてるの？
父神　ちゃんと聞いてるよ。
母神　あなた、本当は、やりたくてやってるでしょ。
父神　違うよ。
母神　違わない。娘がひどい目に合って、張り切ってる。
父神　その言い方はないだろ。
母神　言い方がきついのは謝る。あなたも私も傷ついてる。
父神　そうだ。だから、
母神　ちょっと落ち着いて考えよう。あなたは今、自分以外の気持ちを無視しようとしてない？
父神　していない。
母神　あの子があなたに何かしてほしいって言った？
父神　言えるわけ無いだろ。
母神　あの子とちゃんと話をした？
父神　何も言わないんだ。
母神　あなた、一方的に自分の気持ちをぶつけて、寧を、な、な、殴った。（殴ったという言葉が出にくい）
父神　殴ってないよ。ちょっと、叩いただけだよ。俺も反省してる。
母神　ちゃんと謝ったの？
父神　うん、でも、何も話してくれない。あの子はもう言葉を奪われたんだ。
母神　誰が奪ったの？
父神　あいつらだよ。
母神　あいつらって誰。
父神　寧をレイプした二人組のことだよ！
母神　（ちょっと息がしにくくなる、吐き気もする。受け止められない）ごめん。
父神　（冷静になろうとする）

母神　（間）言葉を奪ったのは、私達なんじゃないかな。
父神　（そうだと言えない）
母神　ちょっと、アイス買ってくる。

母神は出ていく。
父神はその場に一人きりになり、なんだかやりきれなくなって、手に持っていたぬいぐるみに怒りをぶつける。

父神は酒瓶を持ってきて、一気に飲む。

街灯に明かりが灯ると、心がいる。
思兼も立っている。

思兼　こんばんは。
心　こんばんは。
思兼　心くんだよね。
心　そうです。あなたは？
思兼　僕は思兼。
心　何の用だね。
思兼　君にきっかけを渡しにきたよ。
心　何のきっかけですか。
思兼　話し合いに来てみませんか。
心　何の話し合いですか。
思兼　世の中を良くするための話し合いだよ。

心　そうですか。

榊があらわれる。

榊　心。
心　あなたは誰ですか。
榊　僕は榊。話し合いに参加している。こんばんは。
心　こんばんは。
榊　僕は君のことを知ってる。
心　どうして。
榊　先生は元気かい。
心　先生を知っているんですか。
榊　ああ、昔、お世話になったんだよ。
心　あなたも山の上にいたんですか。
榊　そうだ。
心　今、ここで何をしているんですか、
榊　話し合いながら、世界を良くしてる。
心　そうですか。
榊　君もきなよ。
心　考えさせてもらってもいいですか。
思兼　大丈夫だよ。
榊　文句も不満もたくさんあるだろう。暮らしていくこと、生きていくこと。
心　ええ、まあ。
榊　僕たちはここを、希望とか展望とか、そういうものを話し合える場所にしていきたいと思ってる。
心　はい。

榊　きみの力になりたいなんて、無責任なことは言わない。
心　はあ。
榊　僕たちを助けてほしい。
心　どうやって。
榊　話し合いをしよう。君の意見を聞きたい。まずはそれからだよ。
心　何を話すんですか。
榊　まずはものに触れて識る、怖いものほど細かく分析して、対処法を編みだす。先生のところと、何も変わらない。
心　わかりました、検討します。
思兼　会いたくなったらここにきて、話をしに来るだけでもいい。
榊　心、きみを信じてる。
心　はい。
榊　きみが今大事にしているものはなんだい。
心　まだ、よく分かっていません。
榊　そうか、いつか教えてくれると嬉しい。じゃあ、また。
心　はい。
榊　きみを信じてるよ。
心　わかりました。

街灯が消える。心が残っている。
場は教室に戻っている。

心　そうして、彼らは消えました。
兜　榊がいたんだね。
鍬形　大丈夫だった？　何か、握られなかった？
心　いえ、何も。

鍬形　そうか、なら良かった。
兜　本当に良かった。君が無事で。
心　（首をかしげている）
先生　君たちはこれからどうするんだ。
兜　僕たちはこれから山を下りて、人を集めます。
鍬形　それから、戦います。
先生　集まらないぞ。
兜　やるしかないんです。
鍬形　黙って死にたくない。
先生　どう戦う。
兜　まずは敵の呼びかけに応える。
鍬形　そこから対話が成立するか、やってみるつもりです。
先生　敵の名前はわかってるのか。
兜　いえ。
先生　気をつけろ。名前のない敵の呼びかけには答えなくていい。
鍬形　はい。
兜　気をつけます。
先生　もし、呼びかけに応えたあと、力づくで排除されそうになったら。
兜　黙ったままではいません。
鍬形　最後まで声を上げ続けるつもりです。
先生　周りの人に、見てみぬふりをされたら。
兜　それでも声を上げ続けます。
鍬形　そうならないように、人を集めるんです。
先生　どんな人を集めるんだ。
兜　ひとつずつ、ドアをたたきます。

先生　やみくもか。
鍬形　ええ。
先生　きりもみにされる。
兜　それでも声は上げる。
先生　なかったことにされたら。
兜　え。
鍬形　なかったこと？
先生　そう、最初から君たちがいなかったことにされたら、それこそ水の泡だ。
兜　そうか、それは考えていなかったな。
先生　きちんと生き残る方法も考えなさい。玉砕というのは、何も考えていないのと同じだよ。
兜　分かってはいるんですがね。
先生　人間がどうして大勢の人間を殺すことができるか分かるか。
鍬形　いえ。
先生　何も考えないからだ。ただ上の命令に従い、そうだそうだと言い続けているうちに、多くの市民を殺した人間がいた、自分に責任はないと思って。これは悪いことなんだ。分かるね。
兜　肝に銘じておきます。
鍬形　どうなるかはわかりませんが。
心　健闘をお祈りします。
先生　心。
心　でも。
兜　ありがとう。
鍬形　僕たちを見ていてほしい。
心　はい。見ています。（二人と握手をする）
紋白　お気をつけて。
花　お気をつけて。

寧　（黙って見送る）

兜と鍬形は去る。残された人々はそれぞれ二人を送る。
その時、客席側でその光景を立って見ている人間がいる。
彼女の名前は脱獄王。脱獄王は欠伸をして、客席に腰掛ける。

先生は意気消沈し、奥に引っ込む、心は考え事をしに、一人になれる場所へ。
紋白と寧と花は、その場に残される。

紋白　ねえ、寧。私ね。
寧　やめたほうがいいと思う。
紋白　え。
寧　あのひとたち、無理だと思う。
紋白　え。
花　どうして。
寧　何も変わらないと思う。
紋白　どうして。
寧　ごめん、あまり話したくない。（寧は去ろうとする）
花　待ってよ。（引き止める）
寧　やだ。
花　少し話してもいいんじゃない。
寧　ごめん。
花　わかった。
寧　（去る）
紋白　ねえ、花。

花　ん。

紋白　私、何かよくないこと、言ったかな。

花　ううん。特に。誰も悪くない。とはいっても、このまま眠れる？

紋白　だめかも。

花　今日はちょっと付き合ってあげるよ。

紋白　なんか、優しいね。

花　ううん、通常営業。

二人は編み物を始める。

母神がアイスを買ってくると、父神が立っている。
客席からは顔が見えない。

母神　ただいま。

父神　おかえり。

母神　（その形相に驚いて買ってきたアイスの袋を落とす）

母神は怖がっている。父神はゆっくり母神に近寄る。
母神は怖くて動けない。
父神は母神をゆっくり力強く母神を抱きしめると、耳元で小さくささやく。
母神は放心しているので、父神はゆっくり母神の頭を撫でる。

母神　（父神を突き飛ばす）今、今、いまなんて言ったの。

父神　だから、もうひとり作ろうって、

母神　何考えてるの。

父神　家族を増やそう。もうひとりとは言わず、もっとたくさん。
母神　何言ってるの。
父神　気づいたんだ。生きてるだけで喜びだって。
母神　あの子はまだ死んでない。
父神　そう、まだ死んでいないけど、苦しんでる。
母神　じゃあなんで。
父神　僕たちが幸せになれば、あの子を助けてあげることができる。
母神　信じられない。
父神　この世には悲しいことが多すぎる。だから幸せを増やして、苦しみを分け合おう。幸せの平均値を上げていくんだ。
母神　ちょっと。
父神　家族は浮き沈みを繰り返す。永遠に。
母神　（何がしたいかわかり始めた）落ち着いて、聞いて。
父神　落ち着いてるよ、いまが一番冴えてる、俺、目が覚めたんだ。やっとわかった。全部分けたほうがいいんだ。
母神　（ちょっと早口になりはじめる）生活が苦しいから、まずは一人、ありったけの愛情を注ぎ込もうって言ったのはあなたでしょう。
父神　きみのことも同じくらい、いや、それ以上に大事なんだ。次からは俺も手伝う。
母神　なに。
父神　掃除とか、洗濯とか、料理も覚えるよ。覚えることばっかりだな。子どもたちを連れて、海に行こう、免許も取るよ。車も買おう。みんなで登れる山にも行こう。人いきれには疲れてしまうから、息抜きも必要だし、引っ越しもしよう。車があれば、駅から離れていても大丈夫だし。
母神　違う、違うよ。（かなしくなってくる）
父神　なにが？
母神　そんな余裕ないって、言ってたじゃない。（言葉が通じないような気がする）
父神　大丈夫、俺は変わる。信じて。愛してる。

母神はその顔を見て、逃げようとする。
父神はすばやく乱暴に母神を捕まえて、床に引き倒し、覆いかぶさる。

母神　（泣きそう）やめて。
父神　かわいい。かわいい。
母神　気持ち、悪い。

父神は、母神の首を締める。そのあと、かわいいしか言えなくなって、無理やり子供を作ろうとする。

母神　助けて！

父神は母神の表情を見て、手が止まる。
母神は近くにあったものを手に取り、父神をなぐる。
父神は昏倒し、母神は何らかの手段で身を守る。
身を守って父神を殺す。
そうして父神は動かなくなる。
母神は立ち上がる。長い時間その場に立っていた気がするし、
蛍光灯の明かりが気持ち悪く思えてくる。
事態を認識したあと、そのあたりをうろうろして、
電話を取ってきて、ちょっと迷ったあと、電話をかける。

母神　すいません、あの、夫を殺しました。はい、手で。ええと、港の見える街の、一丁目です。すいません、誰かきてくれませんか。無理やり、されそうになったんです。はい、もう動いていません。

そんなやりとりをしている間に、父神はいつの間にか立っている。母神は驚いて受話器を落とす。

父神　昔、あなたに一目惚れをしました。あなたとたくさん話しをしたあと、好きになりました。お互い自立した人間同士、支え合い、笑い合って、そんなふうに生きていけたらと思います。なんか、笑うと眉毛が八の字になるじゃないですか。なんか可笑しくて、（今、気づいた。ごめんね、僕が撮った君の写真がぶれてるの、全部、僕が笑っていたからなんだ。）

母神は父神を殴ると、父神は倒れてまた死体に戻る。
母神はびっくりしたり、怖かったり、急にいろんな感情が湧いてきて、泣く。
泣かなくてもいい。

父神は目を覚ますと、輪っかを取り出して頭につける。別人みたいに元気になり、はしゃいだあとに去っていく。

水掛男二人が花に水をやっている。

水掛男１　かわいいなあ。
水掛男２　かわいい。
水掛男１　もっとかわいくなるかな。
水掛男２　なるよ。
水掛男１　強いなあ。
水掛男２　強いねえ。
水掛男１　もっと強くなるかな。
水掛男２　もっと強くなるよ。今まさに強い。

先生は山を下りて演説の準備をしている。

先生　本当にいいのだろうか。

心　やってみましょう。
花　それからですよ。
先生　わかりました。とりあえず、考えていることを喋ります。この話を聞いてほしい人は必ず無視しますから、皆さん、いい感じに野次を入れてください。
花　野次らなきゃいけない理由とかはあるんですか。
先生　ひっかかりを増やす。僕が自分の意見をぶつけるだけの人間じゃないってことは、人の声に答えてみないと、示すことができない。
心　なるほど。
紋白　先生、それは、ある意味サクラっていうのでは。
先生　ええ、でも、背に腹は変えられません。僕は何でもやりますよ。
紋白　何でもやっていいんですか。
先生　優先させるだけですよ。僕は君たちと一緒にいたい。
心　はい。
先生　僕が間違ったことをしたら、君たちには、違うと言ってほしい。
紋白　先生、私、なんか違う気がする。
先生　うん。ありがとう。でも、僕は今、迷子なんだ。迷子のときは、声をあげるしかない。
紋白　それしかないんでしょうか。
先生　わからない。だから、見ていて。
紋白　はい。
花　手、震えてますよ。
先生　分かる？
花　最近わかるようになってきました。
先生　恥ずかしいな。
心　僕は先生を支持します。
先生　ありがとう。じゃ、始めるよ。

先生はマイクを手にとって、演説を始める。

先生　いま、みなさんは、大きなひとかたまりになっています。大きなひとかたまりというのは、一人がどこにも属さず、団体や組織に疑問の目を向けている個人が多いということです。では、なぜそうなってしまったのか。僕はそれを考えています。戦争が終わった。やめてくれと言うと銃弾が飛んでくる。助けてくれと言うと爆弾が降ってきた、戦争が終わって、私達は民主主義を勝ち取りました。

野次　民主主義ってなんですかー！

先生　私達の一人ひとりが平等であるということ。そして、意見が対立した場合、大勢が少数の意見を限りなく尊重することです。そして、そのための面倒くさい話し合いを、時間をかけてやっていくことです。

野次　偉そうにするなー！

先生　私は偉くもなんともない。たしかに人が人に何かを教えるのは変だ！　あなたも、あなたも、僕と話そう。よければ話しませんか。

野次　何がしたいんだ！

先生　会話がしたい。意見は戦わせるものだ。乱暴な言葉を投げ続けるだけはやめにしよう。あなたも！　そこのあなたも！　話しませんか？　何が起きているのか、一緒に考えてみませんか？　最近誰かに、助けてって言いましたか？　限界があるのは、まだ引き返せる場所があるってことです。少なくとも希望が少しはあるってことです。限界まで我慢するっていうのは、そういうことです。限界なんて、もうないんじゃないですか。疲れてしまいましたか？　何も考えたくないですか？　（急にブチ切れる）考え続けなきゃ人間死んでるのと同じなんだよ！　ゾンビども、よおく聞け、お前たちはゾンビだ。死んでる。死んでるくせに優しさで他人を齧り殺して増え続ける。増えて行進する。だが、ゾンビの行進は夏祭りの会場じゃねえんだ。ゆるやかな坂を下って、炎の中に向かっていってる。灼けて死ぬ。みんな、灼けて死ぬんだ。そうやって、地獄に向かってみんな仲良く歩いていくうちに、生きている人間も紛れ込む。みんな、暑く、苦しい。でも、何も言わない。そのうち誰かが痛いとか暑いとか叫びだすに決まってるって、歯を食いしばる。でも、そんなことはないんだ。苦しみや悲しみのない世界なんて、そういうもんだろう。知らないって？　何言ってるかわかんないって？　仕事辞めて寝ろよ、そしてうちに来い。飯を食わせてやる、汚くて狭いが、寝るところも用意してやる。話そう。一緒に図書館に行って本を読もう。考え

よう。俺の血の涙で溺れさせてやる。あんたが生まれながらに持っているものを一緒に探してやる。

先生は我に帰る。紋白と心がいる。

先生　どうでした？

紋白　ちょっと乱暴でした。前半とのギャップが悪い方向に働いたと思います。

心　みんな、通り過ぎていってしまいました。

花　あと、名乗ったほうがよかったかも。

先生　ああそうか、そうだったね。ごめん、久しぶりすぎて、やっちまいました。

寧は拍手をしている。

寧　謝らないでください。

先生　ありがとう。ありがとう。

寧　最後、乱暴じゃなければ、もっと良かった。

先生　ありがとう。でもちょっと悔しいな。少し、頭を冷やしてくるよ。

寧　はい。

花　また、やったほうが良いと思いました。

先生　うん、そうだね。

先生はその場を離れる。心もついていく。

寧と紋白と花の三人になる。寧は紋白を睨んでいる。

花　ちょっと買い物してくる。（去る）

紋白　うん、行ってらっしゃい。

寧　（紋白を睨んでいる）
紋白　な、なに？
寧　しっかりしなきゃと思って。
紋白　え、どうして。
寧　私は悪いやつなんだ。
紋白　さあ、私にはわかんないけど。
寧　世の中みんな悪い奴ばっかりで頭にくる。でも一番悪い奴は私だ。
紋白　悪い人なんていない、嫌な目にあった人がいるだけだ。
寧　うるさいバカ。
紋白　バカって言っちゃ駄目。私だって、なにを信じたらいいかよくわからない。信じなくてもいいことだけで話をしても、生きてるのか死んでるのか、わからなくなる。
寧　いつか考えなきゃいけないのはわかってる。でも、襲ってくる。わかる、わかるんだよ。考えなくちゃいけないのは。
紋白　どうして考えなくちゃいけないの？
寧　先生の言う通り、考えないと、死んでいるのと同じだ。だから考えなくちゃいけない。でも、壊れそうになる。いや、もうわたしぶっ壊れてるのかもしれない。
紋白　（寧をハグする）
寧　ごめん。駄目だ。無理。まじで無理だ。いや、違うんだ、ごめん。ごめんね。
紋白　（どうしたらいいかわからない）ごめん。
寧　ごめん。
紋白　ごめん。
寧　ごめん。
紋白　ごめん。

寧と紋白は、なんとなく泣いてしまう。

寧　駄目だ、私、駄目だ。
紋白　駄目じゃないよ。
寧　それも言わせちゃってる。
紋白　ちがう。
寧　あー、違うんだよ。畜生。
紋白　死んでいるのと同じって、何が悪いんだろう。
寧　え。
紋白　すぐに生き返ることができるから。
寧　うん。
紋白　考えても駄目だったとき、壁に突き当たったとき、どうなってしまうんだろう。
寧　（頭をかかえる）あー。あー。そうなんだよ。

水掛男二人は捕まって拘束されている。

水掛男1　なんでこんなことするの？
水掛男2　なんでこんなことするの？
虫　なんでこんなことしたの？
水掛男1　あんなことって何。
虫　君たち、たくさんの女の子に、水をかけまくってたでしょ。
水掛男1　かわいかったから。
虫　かわいいと、誰でもいいの？
水掛男2　もっとかわいくなってほしかった。
虫　何言ってるの。
水掛男1　だから、水をあげたんだよ。
虫　だから、なんで。

水掛男２　もっと、かわいくなるから。

虫は水掛男を殴る。

水掛男１　どうして殴るの？
水掛男２　話そうよ。
虫　だから、なんで。
水掛男１　わからないんでしょ？
水掛男２　なにがわからないの。
虫　偉そうに、言わないでほしい。
水掛男１　まずは、僕たちの話を聞いてほしい。
虫　聞くよ。
水掛男２　じゃあ、話そう。これ、解いてくれないかな。
虫　（迷う）

雨が降ってくる。
寧は傘をさし、紋白に渡す。

寧　あげる。
紋白　え。
寧　あげる。
紋白　は？
寧　だから、あげる。
紋白　ありがとう。寧はいいの？
寧　いい。

紋白　よくないよ、

寧　ちょっとちがった。

紋白　なにがちがうの。（傘に入れようとし、出ようとする攻防になる）

寧　意味がないんだ。

紋白　風邪ひいちゃうよ。

寧　たぶんひかない。

紋白　んなわけないでしょ。

寧　聞いて。私は水を浴びた日から、心のなかでずっと雨が降ってる。どうすることもできないし、傘は私を何からも守ってくれない。

紋白　寧は変なことを言うね。

寧　変で悪かったな。

紋白　私が守ってあげる。

寧　（少し震える）

紋白　え、どうしたの？

寧　紋白ー！（飛びつく）

紋白　（傘を閉じて、構えて牽制する）

寧　（にやりと笑う）

花が小走りでやってくる。

花　ごめん、遅くなった。なにやってんの。

紋白　決闘。

花　え？

寧　名誉を賭けて、決闘してた。

花　はあ？

紋白　うそ。
花　はいはい。
紋白　花、花もおいで。（傘を開く）
花　（入ろうとして、狭い）いや、もう私濡れてるからいいよ。
寧　おいでおいで。（引っ張り込む）
花　なんだなんだ。
紋白　秘密。
花　え、なに。
紋白　うそうそ。
寧　花、帰ったら、私の話、聞いてくれる？
花　やっと、話してくれるんだな？
寧　え。
花　私だって気になってたんだよ、あなたのこと。
寧　うそ。
花　ほんと。私、選ぶ言葉が強いから、気をつけようとしてる。
紋白　だから、ちょっと遠くで見てるんでしょ。
花　やめてよ。
寧　（ちょっと笑う）
紋白　（傘のなかにみんなを入れる）このまま山の上まで、一緒に帰ろう。
花　やだよ、あるきにくいじゃん。
紋白　おねがい。
花　しょうがないな。
寧　ありがとう。
花　なに言ってるんだよ。（寧のほっぺをつかむ）

ぎゅうぎゅうで頼りなく三人は歩いていく。
父神は舞台上を彷徨っている。
虫は両袖を血に濡らして、歩いていた。

父神　あれ。
虫　ああ、お父さん。
父神　きみ、僕のことが見えるの。
虫　どうしたんですか。
父神　俺、ちょっとした手違いで死んじゃったんだよ。
虫　ああ、そうですか。
父神　俺、死んじゃったんだよ。
虫　わかりましたよ。
父神　っていうか、君、見えるほうなんだね。
虫　（すこし間を置いて、言葉の意味を理解する）あ、そうなんですね。あ。なに。
父神　たぶん、それなりに人を殺したからです。
虫　そういうもんなの？
父神　殺してから見えるようになったんですよ。
虫　何人殺したら見えるようになるの。
父神　何人とかわかんないですよ。
虫　でも、ぼんやりと見えるもんじゃないだろ。会話だってできるんだし。
父神　数えないようにしてるんですよ。
虫　どうして。
父神　命は数えるべきじゃない。
虫　でも、死体は数えられるでしょ。

虫　そんな数えてたら、やばい人じゃないですか。
父神　それもそうだね。
虫　もう、ぼくに人生はないんです。
父神　俺もだよ。ところで。
虫　あ、捕まえましたよ。強姦魔二人。
父神　あ、そう。ちゃんと、娘を襲ったやつだよね。
虫　はい。一緒に遊んでいたら、おしえてくれました。
父神　え、遊ぶって、何。
虫　企業秘密です。
父神　そいつら、まだ生きてる？
虫　生きてます。
父神　そうか。
虫　よかったら、これから案内しますよ。
父神　ああ、お願いします。
虫　会って、どうします？
父神　会っても話せるかどうかわかんないんだよな。
虫　僕がいます。
父神　あ、でもそうだ、君にお礼ができない。
虫　ああ、それは大丈夫です。僕も藁と同じです。
父神　そうなの。
虫　はい。あと、もらえるものは、もらっておきました。
父神　え、なに？
虫　手。
父神　手？
虫　はい、彼らの手をもらっておきました。

父神　そのままの意味で？
虫　はい。
父神　とっちゃったってこと？
虫　はい。
父神　うわー。

ハートブレイカーズの四人が現れる。四人とも、白シャツの左胸が弾け飛んで、血まみれである。

右心房　あ、いたいた。
左心房　おつかれさまです。
虫　あの、どちら様ですか。
右心房　僕たち、ハートブレイカーズです。
虫　は？
右心室　あなたですか。
虫　え、僕は。
左心房　それともあなたか。
父神　え。
左心室　あなたが虫ですね。
虫　それは僕です。
右心房　水掛男つかまえてくれたの、虫さんですよね。
虫　なんで分かったんですか
右心室　良かったー。やっぱり通じた気がしたんですよ。
虫　何がですか。
左心室　心ですよ。ま、僕らが言うのもアレなんですけど。
左心房　片付けておきました。

虫　は？
右心房　水掛男二人、消しておきました。
虫　なんで。
右心室　邪魔だったんで。
虫　え、ちょっと。
父神　なに、どういうこと。
右心房　あなたがお父さんですね。
父神　君にお父さんと言われる筋合いはないよ。
左心房　お父さん、あなたの娘の敵は我々が討ちました。
父神　どういうことだよ。
虫　ちょっとまって、勝手に殺したってこと？
左心室　立ち直れなかったので。
虫　ちょっと、ちゃんと答えてよ。彼らを、殺した？
右心房　はい、僕の理屈的に、ここは消しておくべきだと判断しました。
虫　あの二人と、話もせずに。命を奪ったんだね。
左心室　はい。
虫　何考えてんだよ。
左心室　すいません、ちょっと心が壊れちゃってるので、わかんないっす。
右心室　でも、ありがとうございました。
虫　本当に、何してくれてんの。
右心室　僕たち、世界を癒やして、自分たちも癒やしているんです。
父神　そういうことじゃない。
左心室　どういうことでしょう。
父神　なんで直接恨みを持つ俺に関係なく、強姦魔のクソ二人を勝手に殺したのか、聞いてるんだよ。
右心房　だから、世界を癒やしているんですよ。

父神　俺たちの気持ちはどうすればいいんだよ。
左心室　ごめんなさい、わからないです。心が壊れちゃっているんで。
虫　なんで、こんなことを。
右心房　心が壊れちゃったから。
虫　いや、これは気持ちの問題じゃなくて、理屈の問題だと思いますよ。（怒っている）
左心房　あの、よければ応援してくれるとありがたいです。
虫　無理だよ。
右心室　無理なことなんてない。一緒に世の中、良くしていきましょう。
四心　良くしていきましょう！
左心房　では、また、どこかで。（解散して去っていく）
父神　（混乱して、笑い出す）なんなの、あいつら。
虫　なんなんでしょう。
父神　ちょっと、確認しにいこう。
虫　まあ、確実に死んでるでしょうね。
父神　なんでそんなことが言えるの。
虫　少なくとも、あいつらにはあなたの姿が見えてる。
父神　そこで判断するのは、早いんじゃないの。
虫　お父さん、変わりましたね。
父神　まあね。（頭の上の輪っかを指差す）

父神と虫はその場を去る。
藁と脱獄王が話している。

藁　困ってるんだね。
脱獄王　藁にもすがりたい。

藁　都市伝説の類だと思ってたよ。
脱獄王　私は実在する。体もあるし、言葉も喋れるぜ。
藁　要件を聞こう。
脱獄王　一夜の宿を探している。話し合いの息がかかっていない場所だ。どんなところでもいい。
藁　それで、どうする。
脱獄王　さあ、せっかく外に出たから、ゆっくり眠りたい。今夜は。
藁　何を捧げる。
脱獄王　（懐から何か取り出す）看守の鍵だ。
藁　もう持ってる。
脱獄王　しょうがない、藁の手になる。一度だけ。
藁　ほんとうだな。
脱獄王　錠前は何度も破ったが、約束を破ったことはない。
藁　（手を差し出す）
脱獄王　ん。（その手を握る、握手をする）
藁　じゃあ、案内しよう。
脱獄王　ん。

水掛男3と4がうろついている。ふたりとも喪服に身を包んでいる。

水掛男3　かなしい。
水掛男4　かなしい。

街灯に明かりが灯る。麒麟、榊、岩戸、思兼がいる。

岩戸　困ったな。

麒麟　岩戸、どうしたの。
岩戸　脱獄王が消えた。
榊　消したわけじゃなくて？
岩戸　見つからないんだ。
思兼　どこで消えたの。
岩戸　港の見える丘。そこで足跡が途絶えた。
麒麟　罠は。
岩戸　全部解除された。しかも、解除されたものが、質に流れてる。
麒麟　やってくれるな。
岩戸　悔しいよ。ここまでこけにされたのは初めてだ。
榊　脱獄王。なかなかやってくれるね。
岩戸　あと、山を下りた人間が人を集めようとしてる。
麒麟　いつのもように、対応すればいい。
榊　山を下りた人間には気をつけたほうがいいよ。
思兼　じゃあ、警官を送り込んでしまおう。
岩戸　やってみるよ。
榊　気をつけて。
思兼　みんな、うまくやれると思うよ。
榊　信じてるよ。

街灯が消える。話し合いの人間も姿を消す。
山の上の教室。
兜と鍬形は立ってる。もう事切れている。
その状況に心と先生は狼狽している。

心　どういうことなんでしょう。
先生　（脈を確かめたりして）死んでるね。
心　死んでいるんですか。
先生　うん。
心　なんでしょう。誰か届けにきたんでしょうか。
先生　いや、それはないよ。
心　どうして。
先生　ほら、足跡が。
心　本当だ。
先生　帰ってきたのかな。
心　死体が、歩いて？
先生　うん。
心　こんな姿になっても。帰ってきたんですね。
先生　うん、帰ってきてくれたんだ。
心　義理堅い人たちですね。
先生　生きててくれたほうがよかったんだけどな。
心　はい。
先生　おかえりなさい。
心　おかえりなさい。
先生　これじゃあまるで、僕が呪いをかけてしまったみたいだな。
心　あんまり自分を責めないで下さい。
先生　ありがとう。
心　いえ、お茶を沸かしてきます。
先生　うん。
心　（その場を離れる）

先生　君たちがどれだけ頑張ったか、たくさん話してもらわなきゃいけないね。

兜と鍬形の遺体の頭がゆっくり垂れる。

先生　本当に帰ってきてくれてありがとう。

心はケーキとお茶を持ってくる。

心　先生、どうぞ。

先生　ん、ありがとう。そういえば、紋白と花と寧は？

心　お風呂に入ってます。

先生　三人一緒に？

心　…はい。

先生　そっか。

トレイは机の上に置かれる。

先生はゆっくり腰を下ろす。心は去る。

先生　僕は、やっぱり迷子なんだよ。こんなになってしまっているのに、大事なことを決めかねている。

母神は椅子に座っている。

その側には弁護士。

弁護士　それで、無理やりされそうになったんですか。

母神　はい。

弁護士　それと、娘さんの件は、どうして、相談しなかったんですか？
母神　あの、それは。
弁護士　旦那さんが、強引に決めたんですね。
母神　はい、そうです。
弁護士　正当防衛で進めようと思います。
母神　え、はい。
弁護士　夫婦間の強姦は立証が難しいんですよ。しかも、未遂でしょう。
母神　え、はい。
弁護士　そうだ、あなたは殺されかけた。
母神　はい。
弁護士　だから、殺した。
母神　はい。
弁護士　自分がどうしてここにいるのか、わかりますね。
母神　はい。
弁護士　言ってみてください。
母神　私は、自分をレイプしようとした夫を絞め殺しました。
弁護士　あなたが、裁判で言うべきことは？
母神　私は、夫に殺されかけたので、抵抗しました。その際、もみ合いになり、首を締めて殺害しました。
弁護士　あとはこうです、娘の問題を巡って、口論となって、旦那さんが掴みかかってきたんです。そして、あなたは、命の危険を感じた。
母神　はあ。
弁護士　大丈夫ですか。私がやりました。私を死刑にしてくださいって、思ってませんよね。
母神　いえ、ちょっと、まだ、混乱していて。
弁護士　しっかりしてください。あなたは自分のしたことの責任をとらなきゃいけない。だから裁判で裁かれる。生き残って悪い部分を直さなきゃいけない。あなたにも人権はあるんです。だから、必要以上に何かを取られることはあってはいけないんで

す。だから、私はあなたの味方です。あなたが生きる手伝いをします。
母神　あなたは、私を信じてくれますか？
弁護士　みんな、証拠を信じます。

警官隊が山の上の教室に押し寄せる。
先生は、警官に身柄を拘束されている。

警官1　おとなしくしなさい。
先生　してるよ。
警官2　危険なものは持っていないですか。
先生　持ってないよ。
警官3　本当ですか。（先生の身体を探る）
先生　何の権限があって、僕の自由を奪うんだ。
警官4　奪ってなんかいません、協力していただいているだけです。
警官3　あ、これは。（先生の持っている鉛筆を取り出す）危険だ。
先生　なにが危険なんですか。
警官4　尖ってる。
警官1　尖ってるね。
警官2　危ない。
警官3　危ないよ。
先生　何を言ってるんですか。
警官4　ん、なんだこれは。なんか、臭うな。（兜と鍬形の遺体を見つける）
先生　触るな。
警官4　これ、死体ですよ。
警官2　え、死体？　仁王立ちしてますよ。

先生　動くんだよ。
警官４　大丈夫ですか？
警官３　本当だ、死んでますね。
警官２　逮捕。
警官１　逮捕。
先生　やめてくれ。
警官３　あなたはこの凶器を私達に向けました。
先生　こんなことが、許されるはずない。
警官２　この遺体はなんですか。誰ですか。あなたが殺したんですか？
先生　違う。
警官１　連れて行け。
先生　どこへ連れて行くつもりだ。
警官２　大丈夫。安全な場所ですよ。
先生　安全な場所なんてない。
警官１　大丈夫、信じて下さい。
先生　君たちは、何か握られているんだろう。
警官３　さ、何のことでしょう。

心と、それからお風呂上がりですべすべした寧と紋白と花が出てくる。

心　何をやってるんだ。
寧　やめて。
花　やめろ。
紋白　説明してください。
警官１　（拳銃を取り出す）おっと、しゃべるな、抵抗するな、抵抗の意思も見せるな、反論もするな。

紋白　なんで、こんなことするの？
花　説明の義務があるはずだ。
警官1　質問も禁止だ。（撃鉄を起こして、先生の頭に銃を突きつける）

雨が降る。

警官1　雨か。（上を見る）

兜と鍬形の遺体が動き出し、拳銃を奪い、発砲。警官1を無力化。

先生　え。
兜　（警官2、3、4を牽制する）
心　先生。
警官2　なんなんだよ。
寧　（過呼吸気味）
紋白　（寧と花の手を握る）
警官1　本当に動くんだ。
先生　言ったでしょ。
警官1　本当は助けてほしいって言ったら、信じてくれる？
警官4　うるさい。

警官4は発砲動作に入ろうとする。兜は警官4を射殺する。続いて、警官2を射殺、警官3の銃弾を浴びて死体に戻る。鍬形は石を投げて警官3の拳銃を弾き飛ばす。弾き飛ばされた拳銃を警官1が拾い、構えたところを鍬形の拳を浴びる。鍬形は死亡した警官の銃を拾い、警官1を射殺。この一連の動作は、素早く行われる。

警官3はその場を放棄して、走って逃げる。その後を鍬形の死体が走って追う。

先生　待ってくれ！（走って追う）
三人　先生！（その後を走って追う）
先生　お前たちはついてくるな！（叫ぶ）

その場には紋白と、死体だけが残る。
紋白は立ち尽くしている。

暫くして、水掛男3と4がその場に現れる。
二人はゆっくりと紋白に近づいていく。

紋白　え、誰。
水掛男3　こんばんは。
紋白　こんばんは。
水掛男4　すいません、山の下に下りたいんですけど、日が暮れてしまって、道に迷っちゃって。
紋白　ああ、そうですか。案内しましょうか？
水掛男3　いいんですか？
紋白　はい。
水掛男4　ありがとうございます。
紋白　お葬式の帰りとかですか。
水掛男3　はい。
水掛男4　友達の葬式帰りです。
紋白　そうですか。ご愁傷様です。
水掛男3　ありがとう。

紋白　すぐそこまでいけば、下山道に出ます
水掛男３　ありがとう。君、顔色が悪いね。
紋白　はい。
水掛男３　いま、悪いことがたくさんおきてる。
紋白　はい。
水掛男４　みんな、苦しいのにどうしたらいいかわからない。
水掛男３　なのに、自分だけは自分だけはと、安全や平和の取り合いみたいなってるのが、今、悲しいんだ。
水掛男４　ごめんね、会ったばかりなのに、急にこんな話をして。
紋白　いえ、よくわかります。
水掛男４　なんだか悲しい。自分が無力だって思うと、自分が許せなくなるんだ。
水掛男３　そのあと、虚しくなる。
紋白　わかります。
水掛男４　こんな山奥で親切な人に会えてよかったです。
水掛男３　聞いてくれてありがとう。
紋白　いえ。話してくれてありがとう。
水掛男３　いい子だね。
紋白　いえ。
水掛男４　君はきっといつか、良いお嫁さんになると思うよ。
紋白　はあ。
水掛男３　ありがとう。
水掛男４　いい匂いがする。
水掛男４　君、かわいいね。（紋白を無理やり抱きしめる。）
紋白　え、ちょっと。
水掛男４　（じょうろを取り出して、紋白の口につっこみ、水を注ぐ）
紋白　やめて。

紋白は、水掛男二人に蹂躙される。叫ぼうとするたびに口にじょうろを突っ込まれ、水をかけられ続ける。プロレス技をかけられたりもする。

紋白　痛い、痛い、痛い。
水掛男４　ごめんね。
紋白　助けて。
水掛男３　笑ってよ。
水掛男４　泣きそうなんだ。
水掛男３　泣かないでよ。

寧と花が走って帰ってくる。

寧　ちょっと、何をやってるの。
花　その子から離れろ。今すぐ、やめろ。（紋白に駆け寄る）
水掛男３　え。
水掛男４　僕たち、仲良くなったんだよ。
花　何言ってるかわかんない。やめろよ。（水掛男３と４に向かっていく）

花は簡単に身体の自由を奪われて、腹部を殴られる。

花　寧、紋白を連れて、早く。
水掛男３　側にいてよ。
寧　え。（動けない）
花　早く！

花は水掛男たちに蹴ったり、踏まれたりする。

水掛男３　だから、一緒に遊んでるって言ってるじゃない。（悪意の表情が寧に向けられる）
寧　（崩れ落ちる、動けなくなる、急に声が出せなくなる）
紋白　助けて。
水掛男４　君もかわいいね。（寧にゆっくり近づく）

心がかけつける。

心　お前達、一体何をしているんだ。
水掛男３　やばい、男だ。
水掛男４　逃げろ。

水掛男二人は逃げる。心はそのあとを追う。

寧と紋白と花がその場に残される。
三人は静かに泣いている。
長い時間、そのままだ。
寧が上体を起こす。紋白の側に寄る。
寧は紋白の肩に手を置く。
紋白はその手を払いのける。
寧は言葉にできない。寧は紋白を無理やり抱きしめる。
紋白は泣く。
花はそれをじっと見ている。

父神と虫は歩いている。

父神　なんで、あんなことができるんだろう。
虫　さあ、心が壊れているからじゃないんですか。
父神　心が壊れていると、考えることもできなくなるのだろうか。
虫　心を閉じないと死んでしまうと思った人に必要なのは考えや言葉じゃないです。
父神　ほんとうに死ぬことがなくても？
虫　理屈と感覚は違いますよ。
父神　なるほど。分かんねえな。
虫　わからないことは、何も悪いことじゃない。問題は、そのあとです。
父神　ああ、話し合うかどうかってやつ？
虫　そうですね。
父神　状況が悪くなると全部シャットアウトする人間と？
虫　そうです。
父神　こじあけることはできないの？
虫　無理ですね。
父神　面倒くせえな。
虫　面倒っすよ。
父神　ところでさ、
虫　はい。
父神　あんた、なんで虫って名前なんだ？
虫　弱虫で、泣き虫で、蛆虫だから。
父神　ふーん。

虫　なんですか。
父神　俺にはそう思えない。
虫　そうですかね。
父神　新しい名前を考えたほうがいい。
虫　検討しておきます。

寧と紋白と花がいる。
死体はもうない。

紋白　警察には行かない、病院にも行かない。
寧　病院には行ったほうが良い、一緒に行こう。
紋白　わかってる。いったほうがいいことはわかってる。
寧　（少しためらって）どこの誰かもわからないやつの子供ができたらどうすんの。
紋白　切腹する。
寧　バカ。
紋白　（過呼吸）だめだ、落ち着く。落ち着きたい。
寧　一緒に行ってあげるから。
紋白　でも、しゃべんなきゃいけないんでしょ。
寧　私も一緒にいくから。
紋白　なんて説明すればいいの（泣く）
寧　大丈夫。私がいる。
紋白　ごめんね。私、なんもわかってなかった。
寧　しゃべんなくていい。
花　ごめんね。
寧　やめて。

花　何もできなかった。
寧　花は、やるべきことをやった。
花　ううん、失敗した。
寧　私、あなたみたいな勇気を持った人、初めて見たよ。
花　でも、何も変えることができなかった。
寧　ううん。私、変わる。そしたら、あなたは何もできなかった人じゃなくなる。
花　やめて。
寧　あなたは本当にすごい。私は見ていたからわかる。
花　やめてよ。
寧　私は見ていることしかできなかったんだ。
花　悔しいよ。
紋白　ごめん。
寧　ごめん。
花　（両手を広げて、二人を抱きしめる）

走る鉄道の模型を医者は眺めている。
電車は円環の線路を走り、トンネルをくぐって、回り続けている。
その側に、寧と紋白と花は座っている。

医者　（トンネルの中を覗きながら）不正出血。
中も傷だらけですね。
塗り薬も出しておきます。
痛みや違和感があればまた来てください。
あと、これ、ありがとうございました。
何が起きたのか、わかりやすかったです。（折り畳まれた紙を寧に返す）

（少し考えたあと）まだ、何をどうしていいかわからないとは思います。カウンセリングを受けることをおすすめします。心療内科を紹介できますが、どうしますか？

紋白　（首を横にふる）

医者　わかりました。あと、受付で処方箋を受け取ってください。

寧　ありがとうございました。

紋白　（お辞儀をして、立ち去る）

紋白が去り、医者も去る。花も去る。寧はそこに立っている。
多くの人が目の前を歩いて通過していった。
寧はある方向を見ている。
ひとりの女が、立ち止まる。

脱獄王　ねえ、あんた。

寧　（無視して去ろうとする）

脱獄王　あんただよ。（寧の肩を掴む）

寧　なんですか。（手を振り払う）

脱獄王　あんたも見えてるのかい。

寧　なんなんですか、あなたは。

脱獄王　私は脱獄王。どんな場所からも逃げ出すことができる。

寧　そんなあなたが、どうしてこんなところにいるんですか。

脱獄王　諸説あるが、私は頭の病気だとされている。

寧　そんなことはどうでもいいんですよ。

脱獄王　まあ、待ちなよ。

寧　待ちたくない。

脱獄王　助けてあげよう。

寧　何から。

脱獄王　この世のありとあらゆる嫌なことから。

寧　どうやって。

脱獄王　あっち側に渡るんだよ。

寧　なんですか、あっち側って。

脱獄王　なんだ、見えてないのか。

寧　見えたらやばいものは、見えてません。あっち側ってなんですか。

脱獄王　あっち側としか言いようがないんだよな。

寧　はあ。

脱獄王　たくさん見える。みんな静かに座っている。

寧　誰か、いるんですか。

脱獄王　うん、たくさんの人がいる、死んでしまった人かもしれない。

寧　はあ。

脱獄王　いつか、あんたにも見てもらいたいな。

寧　死んだ人なんか見たかないですよ。

脱獄王　まあ、そうだわな。

寧　いま、助けは結構です。

脱獄王　そうか。困ったらいつでも呼んでほしい。

寧　はいはい。

脱獄王　じゃ。お元気で。（去る）

寧　元気になりてえ。

寧は再び一人になる。

寧　手が飛んでくる、たくさんの手が飛んできて私は気を失う。気がつくと手は私に触れている。手は私を撫で回す。手はもの

を作るためのものだ。手はものに触れるためのものだ。ものに触れると、ものを識る。私はものじゃない。たくさんの手がある。たくさんの手のなかから、私は手を選ばなければいけない。手は私の後ろにある。私は手から目をそらす。手、手、切り落としてしまいたい。私にも手がある。私の手には、何ができるのだろう。

心がやってくる。

心　寧。
寧　あ、心。
心　そっちはどう？
寧　お医者さんに看てもらった。
心　紋白は？
寧　生きてる。でも、それ以外のことはわからない。
心　そうか。
寧　花は？
心　少し話した。
寧　どうだった？
心　わからない。ちょっと危ないと思った。
寧　私も。
心　少し、頭を冷やすって言ってた。
寧　うん。先生は？
心　捕まった。
寧　どこに？
心　わからない。
寧　落ち着いて、何が起きたか、ゆっくり話して。
心　わかった。そしたら君のことも。

寧　いま、私のことは、どうでもいいんだ。
心　わかった。
寧　心、何があったの。
心　先生は走って鍬形さんと警官を追いかけた。でも、気がついたら、囲まれていた。大勢の警官が待ち伏せしていた。みんな、銃を構えていた。鍬形さんは僕と先生を逃がすためにたくさんの警官を殺した。そしてたくさんの銃弾を浴びて、死体に戻った。先生は鳥目だから手を引いていたんだけど、岩に引っかかって転んだ。そのときに足をくじいて立てなくなった。僕は先生を抱えて逃げ続けようとした。でも、先生は置いていけって、逃げろって。あとは頼むって。何を？　って思った。そこで気づいた。僕のやりたいことは、先生を手伝うことだ。だから、先生がいないと意味がない。そうして、僕はいつか、先生の役目を引き継ぎたいと思った。だから僕は誰も殺さない。もう、殺してはいけない。僕は話し合いに行く。
寧　今、そんなこと聞いてない。
心　ごめん。
寧　謝らないで。
心　わかった。
寧　でも、どうしたらいいんだろう。
心　わからない、でも、考えよう。
寧　うん。
心　助けてほしい。
寧　私も。
心　じゃあ、助け合うしかないんだな。
寧　そうとも言うね。

　街灯に明かりが灯る。
　榊、麒麟、岩戸、思兼がいる。

麒麟　あとはどうする？

榊　不安の芽は摘んでおこう。
岩戸　そうだね。
思兼　そうしよう。

街灯は消え、話し合いの人々は姿を消す。

母神がいる。彼女は囚人服を着て、服役している様子だ。
花に水をやっている。
そのまま、母神はふらふらとどこかへ行ってしまう。

発明王と、剽窃王が寝転んでいる。彼女たちも囚人だ。
客席から、脱獄王が侵入してくる。

脱獄王　やあ。
発明王　ん？
剽窃王　ん？
脱獄王　お久しぶり。
剽窃王　あれ、脱獄王じゃん。
発明王　久しぶり。
脱獄王　細かい話はあとにしよう、お前らを逃しにきました。
発明王　えー、本当に？
剽窃王　いいよ、もう。
脱獄王　なんだよ。
剽窃王　今更って感じなんだよね。
発明王　あんまり興味がなくなっちゃって。

脱獄王　なにが。
剽窃王　外のこと、いろいろ。
脱獄王　いまは、お前らの力が必要なんだよ。
発明王　えー。特に何もできないよ。
剽窃王　もう、私らは、世の中に忘れられてる。
脱獄王　はいはい、後で聞くから、まずは珈琲一杯付き合え。
発明王　えー。
脱獄王　すぐに済むから。
発明王　本当？
脱獄王　本当。
剽窃王　すぐに済むなら。
脱獄王　よし、行くよ。

脱獄王は二人の王を連れて、客席側から逃げる。

発明王　なにここ。
脱獄王　ここは無力な世界。見ているだけで何もできない世界だ。
剽窃王　どういうこと？
脱獄王　詳しくはあとで教える。
発明王　その珈琲はもちろん君の奢りなんだろうね。
脱獄王　構わないよ。

王たちは去る。
先生は収監されている。
話し合いの人々は彼を尋ねる。

榊　やあ先生。
先生　ああ、君か。
麒麟　調子はどうですか。
先生　山にいたころより、いいものを食べてるよ。
榊　今、どういうお気持ちですか？
先生　さあ、わからない。一人反省会かな。出来ないことが増えて、ようやく自分の気持がわかり始めてきたかもしれない。そんな感じ。罪だと思わないことを、罪だと言われたら、どうしたらいいのだろう。あまりに長く、多くのことを許しすぎた。そこでやっと分かった。私がやらないと決めたこと、いつでもできると思ったことは、いつの間にか、できないことに変わっていた。
思兼　そうですか。
先生　僕はどうなる？
榊　さあ、これから我々で話し合って決めます。
先生　そうか。
榊　先生は、何ができなくなったと思いますか？
先生　怒ることかな。
榊　なぜ。
先生　怒った人間が、会話を打ち切るところを何度も見てきた。
榊　そうですか。
先生　それがどうしても許せなかった。
榊　どうして。
先生　理性を最後まで持てないものは動物だ。
榊　そういう考えが、理性を最後まで持ったまま、人を殺す人間を生んだと思いませんか。
先生　さあ。
思兼　また来ます。

麒麟　なにか欲しいものはありますか。
先生　本をくれないか。
榊　それはできません。
麒麟　本以外だったら、何でも差し入れることができます。
先生　そうか。
榊　では、また。
先生　心は、どうした。
榊　いま、探しているところです。
先生　心にはなにもしないでくれ。
榊　前向きに検討します。
先生　どうして、こんなことをする。
榊　あなたたちは、人を集める力と、集まる価値を持っているからです。
先生　それの何が悪い。
榊　人の集まりは、ものを壊すのが大好きだ。
先生　それは一面にすぎない。
榊　その一面を恐れるほど、今はみんな弱っているんです。
麒麟　だから、僕たちは、物事をいい方向に持っていこうと頑張って話し合ってる。
先生　なら、腰かけてテーブルを囲むべきなのでは？
思兼　今は急を要するのです、だから、すぐ動けるように我々は立ち話をする。
先生　乱暴だな。
榊　でも、そう見えないように、努力してる。
先生　それは努力でも話し合いでもない。
榊　じゃあ、なんです。
先生　（何も言わない）
思兼　そろそろ時間だ。

榊　失礼します。

話し合いの人々は去る。先生は座る。

藁は絨毯を丸めて、身支度をしている。

そこに、女が一人やってくる。

雑学王　店じまいするの？

藁　そう。そろそろ私も飛ぶことにする。

雑学王　ふーん、どのくらい飛ぶの。

藁　さあ、ほとぼりが冷めるまで。

雑学王　ふーん。

藁　脱獄王も飛び回ってるよ。

雑学王　他のみんなは？

藁　脱獄王と合流したと思う。

雑学王　お。そうなの。それはよかった。

藁　近いうちにあなたのところにも来ると思う。

雑学王　そうだといいな。

藁　さて、私はそろそろ行くよ。

雑学王　どこにいくの。

藁　どこへ行ったら良いと思う？

雑学王　無力の世界。

藁　なにそれ。

雑学王　脱獄王に言えば、連れていってくれるはずだよ。

藁　ふーん。

雑学王　じゃあ、お元気で。
藁　あなたはこれからどうするの。
雑学王　これから考えてみるよ。
藁　じゃあ、気をつけて。
雑学王　あなたも。

雑学王はその場を去る。藁は絨毯を担いで歩いて去る。
そのあとを話し合いのメンバーたちが追いかけていく。見えなくなる。

寧と紋白が椅子に座って、話している。花は煙草を吸っている。

寧　なにか、したいこととかはある？
紋白　特に。
寧　そう。
紋白　あれから私なりに考えてみたんだけど。
寧　うん。
紋白　わたしはこのまま、特に、何もせずに生きていこうと思う。普通の女の子として。いや、普通の女の子に戻らなきゃいけないんだけどね。犯人探したりとか、訴えたりとか、同じような目にあった人たちと話したりとか、戦って、裁きを受けさせたりとか、そもそも事件になって騒ぎになったら、それこそ生きていける気がしない。戦うためには名前が必要じゃない。
寧　そうかな、
紋白　うん、みんな気づいてないけど、名前がない人には人権がない。その扱いもされない。必要なのは勇気だけ、あと覚悟。覚悟って、今までの人生を失う覚悟じゃない？
寧　（何も言えない）
紋白　しないんじゃない、できないんだ。頭が真っ白だ。何か言われるのが嫌なんだ。
寧　守ってあげられなくてごめん。

紋白　なんで、寧が謝るの？
寧　ごめん。
紋白　え、よくわからないよ。
寧　わたし、なにもできない。
紋白　いてくれるだけでいい。
寧　そんな。
紋白　あなたも花も、知ってるから、信じてくれるから。それでいいんだよ。
寧　やだよ。
紋白　ちょっと疲れちゃった。もう寝るね。
寧　うん。
紋白　おやすみ。また、明日話そう。
寧　うん。
紋白　明日は、楽しい話がいいな。
寧　うん。
紋白　寧、泣きそうになると、眉毛が八の字みたいになるんだね。
寧　え。
紋白　すっごいかわいい。
寧　なにそれ。
紋白　おやすみ。
寧　おやすみ。

紋白はその場を去る。
心がその場に入ってくる。花は煙草を吸い終えて、その場に来る。

心　寧。花。

花　ん。
寧　なに。
心　どうだった？
寧　わからない。
心　そう。
寧　頭をかかえるよ。
心　僕もだ。
寧　まず、何をするべきなんだろう。
心　そしたら、何をしたいかでまずは考えよう。
寧　私、先生を助けたい。
心　うん。
寧　紋白をめちゃめちゃにした奴らを社会的に抹殺したい。
花　うん。
心　うん。
寧　気持ち悪い。
心　どうしたの。
寧　私、男の人がだめになってきてる。
心　うん。
寧　先生もあなたもとてもいい人、それはわかる。でも、ものすごく怖い。
心　どうして。
花　（寧に寄り添う）
寧　男の人は力が強い。一対一ではまず勝てない。殺そうと思ったら、私は殺されるし、力づくで好きなことをされてしまう。必ずしもそういうことではないって、理屈では分かってるんだ。私、たまに感情をコントロールできないから、そういうふうに人のことを考えてるのかもしれない。
心　そんなことはないと思う。

寧　男の人って、何かを壊さないと感情や欲望をコントロールできないのかな？　そんなことないって信じたいんだよ。
心　ごめん、わからないんだ。努力はしてる。
寧　ごめんね、あなたの話じゃないんだ。でも、わからないことも、わからないまま苦しいことも、悲しい。
心　うん。
寧　先生はいい人だよ。知識を与えるだけじゃなくて、いつ、どこで、誰に対して、そういう使い方も教えてくれる。パニックになって人を傷つけないように、優しく教えてくれる。そういう人はなかなかいない。
心　知ってる？　先生は昔、バリバリの活動家だったんだよ。
寧　そうなの？
花　うん。色々やってたみたい。デモ隊が立ち退きを迫られたとき、鳩をたくさん放ったり、大音量でDJをはじめたり。
心　うん。その話をすると、ちょっと怒る。
寧　へえ。
心　僕は、先生が大好きなんだ。
寧　ありがとうね。
心　え？
寧　なんだか、少し気が楽になったよ。
心　こちらこそ、話してくれてありがとう。
寧　いえいえ。
心　明日、みんなでご飯を食べよう。
花　いいね。
寧　いいかもね。
心　それぐらいしか思いつかない。
寧　ここのいいところは、急かす人がいないところだと思う。
心　そうかもね。
花　そうだね。
寧　私は何もできない。

心　僕もだ。
寧　間違ったことが起きているのは分かるのに、どうしたらいいかわからない。
心　起きてしまったことに、何をすればいいかわからない。
花　でも、何かしなければいけないって気持ちが残る。
寧　うん。
心　どうにかなってしまいそうだ。
寧　うん。
心　あの男たちに、何をしてもいいと思ってしまう。
寧　でも、ここには私と心と、花と、紋白しかない。
心　そうなんだ。ぶつけたいだけなんだ。
寧　うん。
心　とても悔しいよ。そして、悲しい。
寧　あのね。
心　なに。
寧　実は私ね、
心　うん。
寧　紋白と同じことをされたことがある。（間）ごめん、こんなときに。私なんで今それ喋ったんだろう。
花　ううん。
寧　なんだろう、だから紋白の気持ちが分かるってわけじゃないんだけど。
花　ううん。
心　話してくれてありがとう。
花　ありがとう。
寧　ううん。
心　腑に落ちたこともある。
寧　なに？

心　さっき言ってたこと。
寧　ああ。（ちょっと笑う）でもね、男の人が駄目なのは、結構前からだよ。
心　そうか。
寧　聞いてくれてありがとうね。
花　話してくれてありがとう。
心　話してくれてありがとう。
寧　私も寝る。おやすみ。
心　おやすみ。
花　おやすみ。

寧は立ち上がって、その場を去る。
心と花は考え込む。

雑学王は歩いている。
脱獄王が現れる。

脱獄王　お、雑学王。
雑学王　（無言）
脱獄王　どうしたの。
雑学王　いや、来るのは分かっていたけど。本当に来た、と思って。
脱獄王　なんだよ。
雑学王　ちょうど話したいと思っていたところなんだよ。
脱獄王　そう、よかったね。
雑学王　良かったよ。話し相手がいなくなって、限界だった。
脱獄王　そう。

雑学王　今までとは違うんだよね。
脱獄王　なにが。
雑学王　いなくなったと言うよりも、消えてしまったと言うほうが正しい。
脱獄王　そう。
雑学王　（難しい顔をしている）
脱獄王　歩きながら話そう。
雑学王　了解。

二人は歩いていく。

脱獄王　消されたんじゃない。
雑学王　そんな気がする。でも、そうじゃないと思いたい。
脱獄王　どうして。
雑学王　簡単な答えにしがみつくと、弱さの奴隷になる。
脱獄王　なるほど。
雑学王　うん。

間。

脱獄王　他のみんなはもう集まってる。
雑学王　藁からいろいろ聞いた。
脱獄王　話が早い。
雑学王　いや、本当にタイミングが良い。
脱獄王　そうなの。
雑学王　そうだよ。いつもね。

脱獄王　ふーん。
雑学王　で、集まって、どうする？
脱獄王　まずはお茶することになってる。
雑学王　いいね。

水掛男3と4が現れる。

水掛男3　危なかったね。
水掛男4　危なかった、
水掛男3　増えておこうか。
水掛男4　増えておこう。

水掛男5と6が現れる。

水掛男5　おはよう。
水掛男6　おはよう。
水掛男3　やあ、みんな、おはよう。
水掛男4　今日も街に出よう。
水掛男3　（電話をかける）もしもし、ちょっとすぐ来てくれる？
水掛男4　どうしたの。
水掛男3　助けを呼んだよ。

宿屋があらわれる。

宿屋　お疲れ様っす。

水掛男３　お疲れ様。彼は宿屋。
宿屋　　ども、宿屋です。
水掛男３　彼と同盟を組むことにした。。
水掛男４　どういう契約なの？
宿屋　　まず、あなたたちには、僕んちを提供します。
水掛男５　ふむふむ。
宿屋　　それで、あなたたちは女の子を連れ込んで、水をかけまくる。僕はそれをビデオに撮影して売り飛ばす。
水掛男６　ふむふむ。
水掛男３　それでいいよね。
水掛男達　オーケー。
水掛男３　よし、じゃ、いってみようか。

水掛男たちと宿屋はその場を去る。

食卓と料理が準備される。
食卓は作業台みたいなもので良い。
料理は取り分けられる。
料理を作った人間は、料理に関する説明を行う。
手を合わせて、祈りを行う。そして、食事は始まる。
紋白は祈らない。
心は寧と紋白の動作に注意し、よく声をかける。
取り分ける量や、料理の温度など。
食事の感想などを四人は時折話す。
誰かが音楽をかける。

その一方で、四人の王たちが、再会を喜びあい、珈琲を飲みながら話をしている。

剽窃王　（挙手）はい。
雑学王　（指す）はい。
剽窃王　無力の世界ってなんなんですか。
脱獄王　それが、私にもよくわからないんだ。
発明王　さんざん引っ張ってそれかよ。
剽窃王　どうやって入れるようになったの。
脱獄王　（考え込む）絶望したんだよね。
発明王　いつ。
脱獄王　海に囲まれた刑務所にいたときかな。
剽窃王　それで。
脱獄王　あまりにも退屈だし、流石に今回は無理だと思った。本当に手がない。気がつくと、自分を遠くから見ようとしていた。何かヒントはないか。
発明王　そういうときは、想像力を使うんだよ。
雑学王　まあまあ。
脱獄王　そしたら、誰かに見られてるなって、視線を感じて。その方向を見ると、たくさん人がいた。
発明王　それで？
脱獄王　気がついたら、牢屋の外にいた。それから、事あるごとに、向こう側にたくさん人がいるのを見た。あるときは笑い、あるときは泣く、たまに手を叩く。でも、人々は基本的に何もしない。誰かがひどい目にあっていても、助けを呼んでいても、怖い顔をして黙ったままだ。
剽窃王　気持ち悪い話だね。
脱獄王　それで、私はその場所を無力の世界と呼ぶことにした。
発明王　なるほど。

脱獄王　一人くらいだったら連れて来れるような気もするんだよね。
雑学王　やめておいたほうがいいと思う。よくわからないものに手を出すのはあぶないよ。
脱獄王　うーん。
雑学王　それに、見ているのは、何もしないことではないよ。
脱獄王　行動した人の言葉だね。
雑学王　そうかな。
脱獄王　もし、同意を得ることができたら、連れてきて、話がしてみたい。
雑学王　さあ、試せるときがあれば、試したら？
脱獄王　じゃあ、そうする。

間。

雑学王　（挙手）はい。
みんな　（指す）はい。
雑学王　あのね、私、話し合いと戦おうと思う。
発明王　本気で言ってるの。
剽窃王　無理でしょ。
雑学王　ちょっと、無茶をしてみようと思う。
発明王　まず、彼らの姿も見たことないでしょう。
脱獄王　私はあるよ。
剽窃王　え、よく無事だったね。
脱獄王　まあね。
雑学王　君たちはバランスをとるためっていう理由だけで牢屋に入れられたことに納得してるの？
発明王　納得ね。納得はしてない。
剽窃王　理不尽なことばかりだよ。

発明王　今までずっとね。
雑学王　怒りは？
発明王　さあ、どうだったかな、でも、心穏やかな日々だったよ。
剽窃王　生きるために最低限のことだけを続けていくと、静かになっていくんだよね。
発明王　危ないじゃん。
剽窃王　そうかも。
雑学王　そのまま死んでも良かったの。
剽窃王　わからない。
発明王　出てこれて良かったとは思ってるよ。
剽窃王　出られたからだけど。
脱獄王　間に合ったって感じがする。
発明王　そうなのかな。
剽窃王　そうだね。
発明王　とにかく、久しぶりの珈琲は美味しいよ。
剽窃王　うん。
脱獄王　なんで戦おうと思うの。
雑学王　あのひとたち、話し合おうというけれども、自分たちが決めたことをみんなに押し付けてるだけじゃない？
発明王　まあ、そうだね。
雑学王　もう、同じ言葉の繰り返しに耐えられない。私は、自分が無視されているのか、自由を認められているのか、どちらなのか分かっていなかった。どちらでもなかった。
剽窃王　普通に戦ったとしても、私達はあっという間になかったことにされてしまうと思う。
発明王　なかったことになるのはまずい。
雑学王　（頷いている）

間。

脱獄王　戦い方かな。
剽窃王　戦いだとばれないように戦うとか。
雑学王　それだと、あまり意味がないかも。無視される。
発明王　ほとんど意味のないことを続けるって、大事なことだよ。
雑学王　それはわかるよ。
脱獄王　でも、無視される。
剽窃王　無視されることのなにが問題かな。
発明王　心が折れる。
剽窃王　たしかに。
雑学王　明らかに間違っているものは、どこかで必ず正される。そういう期待をどこかでしていた気がする。
脱獄王　そうしているうちに、ここまできてしまったのかもね。
剽窃王　じゃあ、どうする？
雑学王　こういうときは、人を集めたほうがいいと思う。良くも悪くも私たちって浮世離れしたところがあるから。
発明王　否定はしない。
雑学王　更に言うなら、病んだ人、心が折れた人、諦めた人を仲間に加えていくのがいいと思う。
剽窃王　どうして。
雑学王　そういう人たちのほうが小さな変化に敏感だから。
脱獄王　そうかもね。
雑学王　毒ガス事件が起きたとき、先頭の警察官が鳥かごをぶら下げてるのと似たようなもんだよ。
発明王　さすが、雑学王。
雑学王　いやいや。
剽窃王　で、誰を仲間に加える？
脱獄王　一人、心当たりがある。

寧と心と花は、医者と話している。

医者　身近なひとが性暴力被害にあったことで、自分に何ができるか考えたりしたと思います。あなたたちには人を支える力があります。自分は無力だと強く思ったでしょう。そんなことはありません。紋白さんから話を聞いたことで、あなたたちも傷を負いました。あなたたちも被害者です。

花　なにか、他にできることはないんですか。

医者　まずは、身体と心を休めることです。そして、紋白さんを信じてあげることです。それはもう出来ていると思います。

寧　これから先、私達は彼女のことをどうやって手伝えばいいんでしょうか。

医者　身体と心を休めるべきなのは、あなた達も一緒です。

心　分かっています。

医者　紋白さんには、苦しみの引き金になること、安心することを文字にして書くことを勧めました。見ていてあげてください。見ることは、何もしないことではありません。いいですね。自分を責めたところで、紋白さんも苦しみます。してはいけないこと、したほうがいいことは、あなた達のほうが詳しいと思います。

三人　ありがとうございます。

寧と心と花と紋白は海に遊びに来た。

紋白と花は海岸のほうに走っていき、引波に近づき、寄せ波に後ずさる。

寧　免許とか、持ってたんだね。

心　うん。昔、ものを運ぶ仕事をしてた。

寧　何を運んだの。

心　マンガや小説の原稿だったり、引っ越しの荷物だったり、花だったり、食べ物だったり。

寧　ふーん。

心　人が多い海に来るのは久しぶりだ。

寧　犬を乗せたカヤックがいる。

心　ワンちゃん、すごい鳴いてるね。
寧　うん、ずっと鳴いてる。
心　どうして鳴くんだろう。
寧　命の危険を感じているんじゃないかな。
心　え、かわいそう。
寧　あ、アイス売ってるよ。買ってくる。
心　うん、行ってらっしゃい。
寧　はーい。（寧はその場から離れる）
花　（暫くして心のそばに来る）あれ、寧は？
心　アイス買いに行ったよ。
花　どこ？
心　あっち。（方向を示す）
花　ねえ、心、絆創膏持ってない？
心　ううん。
花　参ったな。
心　どうしたの。
花　ちょっと貝殻で切っちゃった。
心　あっちの方に、救護所があったよ。分けてくれるんじゃないかな。
花　わかった。ちょっと行ってくる。
心　紋白は、どう？
花　すごいはしゃいでる。久しぶりに笑ってるの見た。
心　良かった。
花　じゃ、ちょっと行ってくるね。（その場から離れる）
心　うん。

紋白に目を戻すと、彼女は棒立ちしており、そのままゆっくり沖に向かって歩き出す。

心　紋白！（走っていく）
紋白　（心の手が身体に触れると強く拒絶する）触らないで！
心　（躊躇う）戻って。
紋白　嫌だ。
心　戻ろう。
紋白　どこに。
心　みんなのところに。
紋白　いないじゃん。
心　だからそれは。
紋白　戻るって、前みたいな時間のこと？
心　そうだよ。
紋白　無理でしょ。何言ってんの。変わらないよ。今も前も、あなたは見てるだけ。
心　今は違う。
紋白　違わない。信じない。信じられない。じろじろ見ないでよ。気持ち悪い。
心　紋白。（手をとろうとする）
紋白　（手をはたく）
心　寧と花はすぐ戻ってくるよ。
紋白　（無視して浜に歩いていく）
心　（追従する）
寧　（帰ってくる）おまたせ。（アイスを四種持っている）
紋白　えー、おいしそう。
花　（戻ってくる）ただいま。
紋白　おかえり。

寧　紋白から選ばせてあげる。心は最後ね。
心　うん。
紋白　私はこれ。（一つ取る）
寧　私はこれかな。（一つ取る）
花　私もいいの？
寧　うん。
花　じゃあ、私はこれ。（一つ取る）
心　僕はこれか。（一つ取る）
紋白　私ね、海を見るの、初めてなんだ。
寧　じゃあさ、また来ようよ。
紋白　うん、絶対にまた来ようね！
花　私も行く。
紋白　うん。

寧と紋白と花は手を取り合って、走る。はしゃぐ。水を掛け合う。
心はその場に座って、その光景を見つめている。

紋白　（急に振り返って）心！　ごめんね、私、壊れちゃったんだ！
心　（掌を見る、拳を握り、地面に一度だけ大きく叩きつける）

水掛男3と4はカウンセリングを受けている。

医者　それ、しまってくれませんか？
水掛男3　え？
医者　それです。（じょうろを指差す）

水掛男３　え、これですか？（じょうろを持ち上げる）
医者　いいからはやくしまってください。
水掛男３　じょうろが嫌いなんですか？
医者　あなたには、それがじょうろに見えているんですか？
水掛男４　僕にはそう見えてます。
医者　それ、じょうろじゃないんですよ。
水掛男達　え。
医者　まずはズボン上げてください。

寧と心と紋白と花は、椅子に座って、話し合っている。

寧　手紙を書く。
心　多分無理だな。
花　無理やり押しかける。
心　それも無理だ。
紋白　心はなにかないの？
心　今、考えてる。
紋白　出た。今、考えてる。
花　紋白、やめて。
紋白　はーい。
寧　大勢で押しかける。
心　どうやって人を集めるかが問題だ。
紋白　演説でもしてくれれば？　心が、先生の跡を継ぐんでしょ？
心　（考え込む）

寧　できる？
心　わからない。試すことはできるけど。
紋白　やりなよ。
心　やってみる。
花　手伝うよ。
紋白　心の演説、見てみたい。
心　（考え込む）
紋白　野次、飛ばしてあげようか。
心　頼む。
寧　私もやろうか。
心　こういうのは、人が多いほうがいいんだよ。
花　わかった。私もやる。
紋白　石も投げてみようか。
心　え？
花　そこまでやらなくていいでしょ。
紋白　わかんないよ、頭から血を流して喋ったら、みんな見るでしょ。
心　そうかもしれないけど。
紋白　石が飛んできて額を切った。血が流れてくる。心、あなたはどうする？
心　僕は。
紋白　無視して喋り続けるのは駄目、石を投げた人があなたには見える。目があった。どうする？　何を言う？
心　呼びかける。対話を。
紋白　絶対来ない。群衆に紛れる。どうする？　叫ぶ？　呪う？　許す？　何ていうの？
寧　ねえ、紋白、落ち着こう。
紋白　え？　落ち着く？　私落ち着いてなかった？　え、ごめんなさい。違った。違った。
心　え、え、（狼狽）

紋白　（パニックを起こす）

花　（紋白の身体を押さえる）

寧　紋白、紋白、私の顔を見て。

紋白　うん。

寧　ちゃんと薬のんだ？

紋白　ごめんなさい、ごめんなさい、もう飲んだと思って。

寧　ちょっと一緒に行こう。

花　寧も、おねがい。

寧　うん。

寧と花で紋白の身体の両側を支える。

心　大丈夫？（よくわからず、ふらふらついていこうとする）

紋白　お前は来るな！

花　行こう。

紋白　うん。

寧　心、しっかりして！　あなたのせいじゃない！　病気のせい！　悪い奴らのせいだから！　あなたのせいでも、紋白のせいでもない。だから、あなたも頑張って！

心　うん、ごめん。（崩れ落ちる）

寧と花は紋白を介抱しながら、別室に消える。

心はその場で頭を抱える。

許せないとつぶやいてしまう。

そう言ったことで、何かに気がついてしまう。

ふらふらと街灯のもとへ歩いていく。
街灯に明かりが灯る。
榊が立っている。

榊　やあ、心、会えてうれしいよ。
心　（心はなにも言わない）
榊　どうしたんだい。浮かない顔をして。
心　あなたには関係ない話です。
榊　そうですか。ところで。
心　はい、話し合いの件ですよね。
榊　うん。
心　ごめんなさい、僕は戦うことに決めました。
榊　何か心境の変化でもあった？
心　まずはあなたたちなんですけど。目的は何ですか？
榊　この国を良くしていくことだよ。
心　まず、この国ってなんですか、そこに暮らす人達のことですか、それとも政治家たちの行いのことですか。あと、良くしていくって具体的にどういう意味ですか。貧しい人々を救うってことですか、それとも、政治家たちがよく妄想している、一番良かった時間を取り戻すってことですか？
榊　一つ一つに答えていくよ。まず、国に関しては、君が言ったことすべてを含んでる。政治家たちもそこに暮らす人々だ。次に、良くしていくってことも、君が言ったことが全部含まれている。
心　まあ、そうですよね。質問が悪かった。まず、何からしていくつもりですか。
榊　まずは、あらゆる脅威から、みんなのことを守り、悪いところを直していく。傷ついたものを癒やす。
心　あなたたちにとって、脅威って何ですか。
榊　我々の作業を邪魔するものたちだよ。
心　やっと確信が持てました。あなたを殺します。

榊　え？
心　（警官が持っていた銃を取り出す）
榊　（両手を上げる）やめるんだ。
心　いや、殺します。
榊　何の確信を持ったんだ。
心　あなたたちは、都合の悪いことを隠し、なかったことにする。
榊　平和には犠牲が必要なんだよ。
榊　ほら、急に安くなる。僕たちにはまだ、何も考えてほしくないんでしょう。
心　君は先生の跡を継ぐんだろう。殺しは駄目だ。
榊　考えた上での結論です。僕は、僕のやり方で、世の中を良くします。汚い手も使う。でも最後は全部表に出す。
心　嫌がらせだとしたら、百点だね。
榊　そういう気持ちもあります。
心　先生が知ったら悲しむよ。
榊　百も承知です。僕に足りないものがやっと分かったんです。
心　落ち着いたほうが良い。
榊　落ち着いてます。分かっちゃったんで、ちょっと気が晴れました。（発砲する）

榊は倒れる。即死だ。

いつの間にか心のまわりに、兜と鍬形、それから、他の大勢の戦って死んだ人たちの亡霊が現れる。

心　え。なにこれ。みんな、いなくなった人たち？

いなくなった人は、自分だった箱を手に持っている。

心　ぼくも戦います。

鍬形　（笑顔で頷く）

心　紋白を襲った奴らにも手を下したほうがいいんでしょうか。

兜　（笑顔で頷く）

心　監獄をぶっ壊して、先生を助けたほうがいいんでしょうか。

亡霊達　（一斉に真顔で頷く）

心　みなさん、僕を助けてくれますか？

亡霊達　（一斉に笑顔で頷く）

みんな、口々に、戦え、戦え、倒せ、とつぶやきながら、心を拘束し、操ろうとする。

心　でもこれって、願いとか祈りじゃなくて、呪いですよね。

心は身体を拘束されて、操られる。そのまま連れ去られていく。

母神と医者が椅子に座っている。

母神　今更わたしがなにか話すことなんて、あるのでしょうか。今でも、自分がなぜここにいるのか、よくわかっていないんです。こうしていることに、なんの意味があるのか、わからない。

医者　私の仕事は、あなたの話を聞くことです。

母神　話、聞いていました？

医者　聞いていますよ。なんでもいいので話してください。思いつくこと、感じたこと。考えていること。ほんとうになんでもいいです。

先生は牢の中にいる。近くに、ハートブレイカーズの四人も収監されている。

左心房　あのー。
先生　はい。何でしょうか。
右心房　なにか、ここから出るためのいいアイディアとか、ないですかね。
先生　はあ。君たちは一体何をしでかしたんだ。
左心室　正義を行いました。
先生　もっと具体的に。
右心室　世界を癒やしたんだ。
先生　ここは精神病院か？
右心房　そうかもしれませんね、世の中は病んでいる。
先生　世の中って、何だよ。今ここには、僕たちしかいない。
右心室　あなたも傷ついているんですね。
先生　そうなのかもしれない。
左心房　あなたは何をしようとしたんですか？
先生　僕？　僕はね、何もできなかったんだよ。
左心室　僕たちと逆ですね。
先生　はあ。
左心房　僕たちは、いろいろなことをやりすぎたせいでここにいる。
先生　だから、何をしたんですか？
右心房　悪いことをした人たちを消していきました。
先生　消したって、殺したってこと。
左心房　そうです。
先生　どうして。
右心室　僕たちは心が壊れてしまったんです。

先生　なぜ、心が壊れたんだ。
右心房　あまりにも個人的なことなので、ここでは答えかねます。
先生　それはいい。じゃあ、どうして心が壊れているってわかったんだ。
左心室　みんながそう言う。
先生　みんなって誰だよ。
左心房　友達や家族や、僕たちが殺した人たちも。
先生　その人たちはどうした。
右心房　みんな、死んでしまいました。
先生　どうして。
左心房　それも、個人的なことなので、答えかねます。
先生　そうか。
右心室　あまりにも多くのものを奪われたので、僕たちは集まって、結果を出すことにしたんです。
先生　結果？　人を殺すことが。
右心房　みんな、すぐに死ねって人に言うじゃないですか。
先生　ただの言葉だろう。
右心室　でも、言う。
右心房　そして、僕たちが殺すと、顔をしかめる。
左心房　複雑な顔をして、理解できないふりをして、喜んでる。
先生　人の気持ちはわからない。勝手に決めてはいけない。
右心房　でも自分の気持は分かる。
左心室　結果しか求めていないのは、僕たちだ。
右心室　文句しか言わないやつよりはましだって思うことにしたんです。
先生　それはちょっと乱暴だな。
左心房　僕たちは行動した。
右心房　だが、今はここに閉じ込められている。

先生　君たちが殺したのは本当に悪人なのか。
右心室　はい。
左心房　小さな子どもを監禁して子供を産ませた人を
四心　殺しました。
右心房　障害者施設にいた人を眠っている間にナタで殺していった人を
四心　殺しました。
左心室　外国から来た人たちをタダ働きさせて、事故や自殺や病気で殺した人たちを
四心　殺しました。
右心室　街中を火の海にして、多くの人間を生きたまま焼き殺した人を
四心　殺しました。
先生　本当か。
右心房　はい。
右心室　理不尽に奪われたから、力づくで取り返すんですよ。
先生　力ね。
左心房　待ってるだけじゃ来ないんですよ。
右心房　自由や平等っていうのは、基準をクリアした状態のことですよ。
先生　そうだろうか。
左心室　基準が間違っていると、誰も文句を言えない。
右心室　待っていても無残に死ぬだけです。
先生　戦い方ってもんがあるだろう。君たちが理不尽で乱暴に事を荒立てたところで、待ってるのは、自滅だよ。どうして、こんなことになってしまったんだ。
右心房　さあね。
左心房　でも、話を聞いてくれたのはあなたが初めてです。
先生　遅かった。
右心室　自分を責めないで下さい。

先生　うるさいよ。
左心房　どうしたんですか。
先生　僕は、悔しい。

医者と母神。

母神　わたしは、悔しい。
医者　（沈黙）
母神　私、よく、花に水をあげすぎてしまうんです。（間）なぜかわからない。やるべきことも、考えるべきことも、まだまだたくさんあるのに、ふとした瞬間、頭が真っ白になってしまって、止まる。なにか、忘れている気がする。地面が乾いている。花が風に揺れている。前に水をあげたのはいつだろう。ほんのちょっと前だったかもしれないし、昨日だったかもしれない。だから水をあげる。数十分前の事が、数時間や何日も前のように感じるなんて、おかしい。わかってる。わかっているはずなのに、何度もくりかえす。だめになる。そう、全部だめになるんです。
医者　大丈夫です、聞いていますよ。
母神　いままでは、自分のことは自分で変えることができた。でも、どうしてもうまくいかない。何度も間違える。そうして、時間は過ぎ去っていき、繰り返してもいい回数を使い切ってしまったような気がします。私にはもう、許されていない。
医者　（沈黙）
母神　次は、次こそは、そう思って、許された時間を使い切ってしまった。
医者　そうですか。
母神　で、今は、こうして、ここにいる。私にできることはもうなにもない。やるべきことをやるべき時に、できなかった。見送ってしまった。駄目にした。私にはもう何をすることも許されていない。
医者　（黙っている）
母神　そうではない。そう思いたい気持ちはあります。うーん。（考える）言われたくない言葉で頭がいっぱいになっていて、これはもう、言われているのと同じだと、そう思うんです。うん。繰り返しだ。そして、しょうがないって、一人でつぶやく。やっぱり、そうだ、私は悪くない。どこかでそう思っている。

医者　（黙っている）
母神　なにが起きたのかわからない。まだ、もう少し考えたい。
医者　（黙っている）
母神　あなたみたいに勉強した人なら、考えることなんて、頭の片隅で、片手間でできてしまんでしょうけど。わたしは駄目だ。両手でやっとです。
医者　そうでもないです。仕事だからでしょうかね。涼しい顔をしようとしてしまう。
母神　そうですか。
医者　あまりいいことではないんでしょうけどね。
母神　そうでしょうか。

間。母神は頭を抱える。

医者　大丈夫ですか？
母神　わかりません。肝心なことが、まだまだ奥に引っ込んでいて、出てこない。なにかを言いたい、言わなくてはいけない、でも、そのなにかは、確実に自分へ跳ね返ってくる。そして、それを見なかったことにする。とても怖い。
医者　怖いと思うのは大事なことだと思います。
母神　自分には、もう、許されていないような気がする。
医者　よくわかりません。
母神　（首をかしげる）
医者　あなたの時間はあなたのものです。
母神　（黙っている）
医者　わたしにできることは、限られています。
母神　それは、なんとなく、伝わってきています。

間。

母神　正直なところ、自分がなにを間違えたのか、分かりません。
医者　（今はそれで）大丈夫です。
母神　私は、まだ、もう少し、考えたい。
医者　（今はそれで）大丈夫です。
母神　あなたには、わからない。

間

牢獄の中

先生　なんでそんな、かんたんに人を殺せるんだよ。
右心房　さあ、人間の形しているだけですからね。どこが弱いか最近分かってきました。
先生　そういうことじゃない。
左心房　僕たちは人の役に立ちたい。
先生　他にやり方はなかったの。
右心室　あなたは思いませんでしたか。
先生　何を。
左心室　回りくどいやり方は意味がないって。
先生　どういう意味だ。
左心房　どれだけ言葉を投げかけても、受け取ろうとしない。人は集まると、そういう一つの大きな生き物に変わる。
右心房　学校では人生の足し算を教えられるのに、その後待っているのは、圧倒的な引き算だ。
左心室　人生は賭け事だ。賭け事である限り、どれだけ勝っても、絶対的に負けが決まってる。
右心室　みんな、それに気がついただけなんじゃないですか。

先生　やめてくれ。
左心室　だから、血を流している僕らは、血を流しながら、片付けを続ける。
先生　それでも君たちは人殺しだ。
右心房　僕らはもう、あなたのことが大好きだ。
先生　複雑な気持ちだよ。
左心房　苦しみも悩みも絶望も、そうやって、片付けていく。
右心房　僕たちは言ってしまえば、手足をもがれた人間なんです。
右心室　手足を失った人間は、重心が変わる。
左心室　重心が変わると、バランスを崩す。
左心房　まあ、社会に対する復讐っていうのはありますよ。
先生　被害者精神と被害者である事実を分けて考えたほうがいい。
右心房　もう、わかんなくなってますね、そこら辺は。
左心室　理屈はわかりますよ。
先生　世の中の役に立とうとしなくてもいいんだよ。
右心房　もう遅いんですよ。
左心房　始めてしまったから。

虫は、スレッジハンマーを持って歩いてくる。

虫　宿屋がヤリ部屋提供してお金もらってるんですか？
宿屋　ヤリ部屋じゃないです、宿屋です。
虫　君のこと、ずっと探していたんだよ。
宿屋　何でもします、何でもします。
虫　本当？

宿屋　はい。

虫　本当に何でもしていいの？　君、死んじゃうよ。

宿屋　死にたくない、死にたくない。

虫　君は芋虫みたいになっちゃったな。

宿屋　（しゃべれない）たすけてください。

虫　僕は虫っていうんだ。弱虫で、泣き虫で、蛆虫だからなんだけど、君みたいな人間を芋虫にするために生まれてきた。っていうのは冗談で、今はちょっと頭にきてる。大丈夫、君のことは殺さない。ホテルについたら適当に逃げてもいいよ。きっと君のことを助けてくれる人間はたくさんいる。だから、君は色んな人と沢山話して、長生きしてほしい。その両手両足の傷口も、いつかきっと君が生き続ける理由になる。

こうして二人はホテルに辿り着く。
大きなカーテンが下りていて、人間の影が映る。
女の声と、男の声が乱暴に響く。

I

虫　よーし、頑張っちゃうぞ。

虫は袖まくりをする。軽く準備体操をすると、スレッジハンマーを持って走っていく。

水掛男３　この街はいい街ですね、みんな優しい、僕と話してくれる。僕に親切にしてくれる。僕を無視しない。ありがとう、道を教えてくれて。ありがとう、ここに連れてきてくれて、ありがとう、僕を信じてくれて。とてもうれしいよ。

水掛男４　枯れ木に花を咲かせましょう。咲いた花は讃えましょう。

水掛男３　良ければ、記念写真を撮りませんか？　笑ってください。僕も頑張って笑いますから。

水掛男４　撮るよ。はい。

水掛男３　ごめん、泣きそう。

水掛男４　泣かないで。

スレッジハンマーを持った虫が走ってくる。
影絵のような姿が動き、絵巻物のように見える。
肉が粉々になる音と、叫び声が聞こえる。

水掛男5　僕は人間の目を見るのが好きなんだよ。まるでお日様のすがたみたいに、日の出から日の入りまで、表情をかえていく。あなたの瞳は夕焼けのようだ。きれいですね。いいですね。そうだ、一緒に歌でも歌いませんか？

肉が粉々になる音と、叫び声。

水掛男6　苦しいですか？　苦しいですよね。僕も生きるのが苦しいです。なにか言いたい、でも何も言えない。バラバラになりそうだ。だから、ちょっと一緒に叫んでみませんか？　せーの。

肉が粉々になる音と、叫び声。

虫が血まみれになって帰ってくる。息を切らせて。
彼はどこからか、ペットボトルの水を持ってきて、飲み干す。
芋虫は静かに逃げようとする。
虫は、それに気づかないふりをする。
そのまま、虫は床に寝っ転がる。

カーテンが開く。
開くと奥は草原になっている。
寧と、紋白と、心と花がいて、駆け回っている。
先生がゆっくり歩いてくる。

花が三脚を立てて、他のみんなは並ぶ。
花はセルフタイマーをセットして、みんなの並びに入る。
シャッターが切られる。
心と先生は話しながらどこかへ行き、
寧と紋白は手をつなぎながら笑っている。
笑いながら、草原に倒れ込む。
紋白は動かなくなる。
紋白はもう事切れている。
寧は助けを呼ぶ。

寧　誰か！　誰か来て！

花が駆けつける。

花　寧、どうしたの！
寧　紋白が、紋白が。
花　電話、電話はどこ。
寧　血が、血が。

紋白の身体の下から血が大量に溢れ出す。
カメラと三脚は、いつの間にか思兼が回収して去っていった。

花　なんでこんなことになってるんだよ！

カーテンが閉まる。

虫は、まだ、仰向けに倒れている。

母神がふらふらと歩いてくる。
花に水をやりにくる。
父神がそれを盗み見ていて、姿をあらわす。
彼の姿は彼女に見えない。

父神　最後に、君に謝りに来た。といっても、取り返しのつかないことの、何を謝れば良いのかもわからないんだけど。（考える）君はきれいだ。そして、俺は情けない。君にとって俺は、暴力の詰め込まれたただの時限爆弾だったのかもしれない。でも、幸せな時間は、たしかにあった。人間は忘れる。どんなことでも、忘れていってしまう。ならば、覚えていることは、覚えておくことは、とても大事なことなんだと思う。遅かった。すべてが。馬鹿だ、俺は。

母神　（鼻歌を歌っている）

虫　終わりましたか。

父神　え、虫さん、どうして。

虫　終わったらどこかに行ってくださいよ。静かにしてください。考えているんです。

父神　どうしたんですか、

虫　やり残したことがないか。考えています。

父神　もしかして、やったんですね。

虫　だから、やり残したことがないか考えてるって、言ってるでしょ。（間）あ、僕がどっかいけば済む話ですよね。

父神　たぶんだけど、あなたは他の人にはできないことをやり遂げたんだと思う。

虫　やめてください。

父神　君は、他の人には真似できない、難しいことを、やった。

虫　やめてくれ。

父神　すごい。本当にすごい。

虫　僕はただの人殺しです。

　虫は立ち上がって、どこかへ行く。
　母神は上機嫌にスキップしながらどこかへ行く。
　父神もどこかへ行く。
　カーテンがなくなる。
　寧と花が立っている。二人共血と煤まみれである。

花　心、見なかった？
寧　ううん。
花　どこに行ったんだ。こんなときに。
寧　駄目だ、現実味がない。
花　私も、そうだよ。
寧　嘘だよね。
花　そうだって言いたい、私も。
寧　私、何かしたかな。
花　ううん。なんだかな。
寧　前のときも、ここが底だと思ったけど、違ったな。
花　寧。
寧　今がずっと底だ。底にいる。
花　寧。
寧　なあに。
花　私、苦しい。
寧　花。泣きそうな顔してる。
花　あなたも。

寧　こんな顔になるんだね。
花　なに。
寧　触っても良い？
花　うん。
寧　（花の顔を触る）うんうん。
花　寧。
寧　花は死なないでね。
花　（何も言えない）
寧　あなたまで先にいなくなったら。
花　うん、私は大丈夫だよ。
寧　先生に会いたい。
花　うん。
寧　心にも会いたい。
花　うん。

王たちは二人のもとに現れる。

脱獄王　ここはどこだ。
雑学王　山の上だよ。
剽窃王　焼け野原じゃないか。
脱獄王　（寧に気づく）あんたは、また会えたね。
寧　えーっと。
脱獄王　私は脱獄王。
花　誰。
寧　病院にいた変な人。

脱獄王　失礼なだね。

花　この人達は？

寧　知らない。

雑学王　私は雑学王。

剽窃王　私は剽窃王。

発明王　私は発明王。

脱獄王　寧、お前を迎えに来た。

花　なに言ってるの。

脱獄王　私達と来てほしい。

寧　どうして。

雑学王　仲間を探してる。

花　説明して。

剽窃王　わかった。ちょっと長くなるけどいい？

花　構わない。

寧　手短にお願いね。私達も、やらなきゃいけないことがあるの。

発明王　手伝ってあげるよ。

花　まずは話を聞いてから。

雑学王　わかったよ。

街灯が灯る。話し合いの面々がいる。

麒麟　榊が死んだ。

岩戸　榊が殺された。

思兼　まったくもって、予想外だった。

岩戸　残念だよ。

麒麟　どうする。
思兼　どうしよう。
岩戸　許せない。
麒麟　心が人を集めてる。
岩戸　許さない。
思兼　大丈夫、全部うまくいくよ。
麒麟　信じてる。
岩戸　許さない。
思兼　岩戸、ぼくの目を見て。ゆっくり息を吸って、吐いて。

思兼は岩戸の肩を抱く。

思兼　できることをやろう。
岩戸　わかった。

心は集団の中にいる。亡霊たちは支持者の集団のようだ。
彼の名前は大きく、何度も繰り返される。

心　（静まり返るのを待って）生きているっていうのは、いろんなものを表現していくことです。手を使って、言葉を使って、音にして、表情にして、日々の色々な考えや感情を、表に出してる。なら、表現ができなくなるっていうのは、死んでいくことになりますよね。なら、みなさんは、どんどん死んでいってるように思える。この世にある人の作ったもの全ては、人に何かを伝えるために存在しています。みなさんもその中にいる。みなさんの死んだ表情を見ていると、そんなことが頭をよぎります。今、僕らの目、耳、鼻、口が今、塞がれようとしています。その次に、手と足が封じられる時が来るでしょう。何かを言おうとすれば、口先だと言われ、何か行動を起こそうとすれば、邪魔をするなと封じ込められる。間違ってる。国

家はかんたんには崩壊しない。国民は崩壊する。でも、崩壊したまま生きていく。もし、国家が崩壊したとしても、皆さんはそのまま難民となり、そのまま同じ場所に住み続けるような気もする。何かがおかしい、そう思いませんか？　見守ってばかりだった。分かったふりをしていただけだった。だけど、僕は変わる。戦おう。

街灯が灯る。話し合いの人々があらわれる。

岩戸　ちょっと低音が強いね。

麒麟　低音は響くからね。

岩戸　低音カットで。

思兼　（ヘッドホンをつけてミキサーをいじっている）オッケ。

心　今、自分がいる場所はここしかない。でも、それが許されなくなっていくとしたら。

岩戸　高音も強くなってきた。

麒麟　耳が痛いな。

岩戸　高音もカットで。

思兼　オッケ。（ミキサーのつまみをいじる）

亡霊の声が聞こえ始める。

亡霊　お父さんは、働いて、働いて、ある朝、冷たくなっていた。

子供が産めない身体になりました。

涙が、涙が止まらない。

私には、何もできない。

みんな、みんな、死にました。

お前なんて産むんじゃなかったと言われました。
役に立て、迷惑を掛けるなと言われました。

麒麟　参ったな。
岩戸　全カットで。
麒麟　え。
岩戸　全カット。
思兼　オッケ。

みんなの声が聞こえなくなる。

麒麟　静かだ。
岩戸　静かなのが一番いい。
思兼　そうだね。
岩戸　幻みたいになっていく。そうだ、そうだ、なかったことにしてやる。絶対になかったことにしてやる。
麒麟　岩戸、落ち着いて。
岩戸　ごめん、取り乱した。
思兼　落ち着いて、僕たちは間違うことができない。
岩戸　わかってる。
思兼　どうする。
麒麟　ばらばらにしよう。
岩戸　よく見て。
麒麟　何。
岩戸　人がたくさん集まってる。
麒麟　僕には、彼一人にしか見えない。

思兼　僕には、人がたくさんいるように見える。
岩戸　なんだ。
思兼　どうする。ねえ！
岩戸　静かにしてくれよ。警官隊を送り込んでくれ。
思兼　わかった。
岩戸　地ならしをしよう。
麒麟　大丈夫だよね。
岩戸　信じてよ！

思兼は、合図を出す。

警官隊は亡霊たちの群れを摘発し始める。
機動隊が現れ、思兼が手を挙げると銃を構える。
そうして、その場は硬直する。

寧たちの一団がクロスを広げたテーブルを囲んでいる。
空腹の王たちは食事をしている。空腹だから何でも美味い。
花は編み物をしている。

花　それで、話し合いっていうのは、人から考える力を奪う集団ってことはわかった。
寧　あなたたちは、どうして牢屋に入ってたの。
雑学王　世の中のバランスが崩れるからって聞いた。
花　バランス？
雑学王　そう。
寧　何か、とんでもないことをしたの？

発明王　いや、むしろ逆だよ。
雑学王　私達の力は、世の中にとって何の役にも立たない。
花　例えば。
発明王　閃きがあれば何でも作れる。
剽窃王　何でもまねすることができる。
脱獄王　どんな場所からでも逃げ出すことができる。
雑学王　豆知識が豊富。
寧　ほかには？
発明王　美味しい料理が作れる。
剽窃王　DJができる。
脱獄王　どこへでも行ける。
雑学王　コミュニケーション能力が高い。
花　この中に、一人仲間はずれがいます。
雑学王　誰だ。
寧　あ、閃いた。
みんな　なになに。（輪になって寧に寄る、寧から話を聞いた後）ほうほう。
寧　うまくいくかな。
花　今、大事なのは、何かをすることでしょ。
寧　私の中で、それすらも怪しい。
雑学王　でも、面白そうなことだと思う。
寧　ありがとう。
脱獄王　じゃあ、行こう。

一行はそれぞれ出発する。

心　暴力には屈しない。（警官隊の一人に）あんた、名前は？

警官1　自分でありますか。

心　名乗れよ。名前があるんだろ。

警官1　自分は。

岩戸　名乗らなくていい。早くそいつを殺せ。

心　出たな。

岩戸　早くやれ！

心　あなたがやったことは、あなたの責任になる。あいつにも責任はあるが、あなたも裁かれる。

警官1　（撃てない）

心　あんたたちにも名前があるんだろ。僕と話そう。僕はあんな奴よりも君たちの話を聞くぞ。

警官1　お願いです。解散してくれませんか。

心　嫌だ。断る。

岩戸　おい、何やってるんだ。早く。思兼。早くきっかけを出せ。

思兼　ごめん。（右心房が首元に刃物を当てている）

右心房　動かないで下さい。

岩戸　何なんだよ、お前は！

右心房　僕は、ただの人殺しです。

岩戸　麒麟、麒麟、どこにいる。

左心房は既に麒麟を絞め殺していた。

地面に転がる姿が見えた。

花と剽窃王はターンテーブルを用意する。

剽窃王　久しぶりで、緊張する。

花　（配線をつないでいる）先生は、寧に会えたかな。

剽窃王　さあ、もう信じるしかないね。

花　あのさ、聞いても良い？

剽窃王　なに？

花　結局のところ、DJって何をするの。

剽窃王　音楽と音楽を上手につなぐ。もともとはね。でも、今は音楽を分解して再構成したり、切り貼りして、新しい曲を作ったりするって意味に変わってきてる。

花　それって、どういうこと。

剽窃王　最高にご機嫌な時間を生み出す仕事ってこと。

花　意味わかんない。

剽窃王　やってることを言葉にするって難しい。

花　それは、やってみる価値があるってことじゃない？

剽窃王　やってみないと分からない。

ターンテーブルが起動する。剽窃王のDJプレイがはじまる。

亡霊たちは、踊りだす。そのあとの言葉は聞き取りづらくても仕方ない。

寧と先生が歩いてくる。

寧　先生。

先生　寧。無事だったんだね。

寧　先生も、無事だったんですね。

先生　え？

寧　先生、無事だったんですね。

先生　なんとかね。

寧　いろいろあったんです。とにかく、いろいろやってみることにしたんです。

先生　なんだって。

寧　とにかく、ついてきてください。

先生　心は？

脱獄王　（現れる）そいつのところに今から連れていく。

先生　この人は？

寧　脱獄王。

脱獄王　私はどこへでも行ける。

寧　お願い。

脱獄王　わかった。

脱獄王は二人を連れて行く。

心　何だ、この音楽は。

岩戸　思兼、やるんだ。

思兼　嫌だ、僕は死にたくない。

ターンテーブルの近くでは
発明王が、レーザーやミラーボールを操作している。

花　人が、人が集まってくる。

剽窃王　もっと、身体を揺らしてみなよ。

虫がいつの間にか、亡霊の集団に加わっている。

虫　すべての物事には、いつか必ず光が当たる。

花は身体を激しく揺らし始める。

雑学王　音は、居場所を知らせる。音は、言葉の前にあった。
剽窃王　いいからさ、聞いててよ。

心は、警官1から銃を奪い、岩戸を撃つ。

岩戸は撃たれて即死。
右心房は思兼の首を掻っ切る。
それと同時に思兼は腕を振り落とす。機動隊は一斉に発砲。
群衆は一斉に崩れ落ちる。
群衆の中で踊り狂っていた左心室、右心室、虫も倒れる。
剽窃王も、花も、崩れ落ちる。
音が止む。
機動隊は心を囲む。
心は手を挙げる。

寧と先生と脱獄王は心の元にたどり着く。

寧　心。
心　寧。僕、やったよ。先生、僕、やりました。
寧　なにが、どうなってるの。
心　今、こうなってる。

心に、機動隊から動くなと声がかかる。
舞台上の人間は動けない。

父神が客席に現れる。
その側には藁がいる。

父神　なんだか静かになったな。
藁　探しましたよ。
父神　あれ。どうしてここに。
藁　あなたを探していたら、いつの間にかここにいました。
父神　あなたには、私が見えるんですか。
藁　見えます。
父神　ここはどこですか？
藁　ここは神々の世界です。
父神　え？　どういうことですか？
藁　あなたは神です。
父神　え、何いってんの。
藁　あなたは、神です、でも、今はすべてを忘れている。
父神　意味がわからない。
藁　わからなくて当然です。あなたは名前を奪われたのだから。
父神　名前？
藁　自分の名前を言ってみて下さい。
父神　（言えない）いったい、どういうことだ。
藁　あなたが、自分の名前を思いだした時が、全てを取り戻すときです。
父神　すべてを取り戻す？

藁　はい。（稲穂を一本取り出す）思いのままに。これをお持ちください。
父神　（稲穂を手に取る）
藁　あなたの名前は思兼。思慮深い神です。

父神は名前と記憶を取り戻し、真の思兼となる。

真思兼　ありがとう。頭がすっきりしたよ。
藁　いえ。
真思兼　すごいな、人間は。

真の思兼は舞台上に出ていく。
藁はそのまま姿を消す。

真の思兼は稲穂を一振りする。寧以外のすべてが止まる。

真思兼　寧。寧じゃないか。
寧　お父さん？
真思兼　うん。
寧　どうしたの。
真思兼　話すと長いんだ。
寧　あとで全部聞くよ。
真思兼　どうやら、俺は神様だったみたいだ。
寧　何の神様なの。
真思兼　段取りの神様。
寧　どんなことができるの。

真思兼　大体のことができる。
寧　私、話がしたい。
真思兼　誰と？
寧　沢山の人。いなくなってしまった人や、これから会う人、みんな。
真思兼　うん。
寧　そういう人たちと話してみて、私になにができるか考えたい。
真思兼　そうか。（少し考え込む）わかった、いなくなってしまった人たちを呼び戻す。
寧　本当？
真思兼　うん。でもね。必ず、今、この時間に帰ってくることになる。
寧　うん。
真思兼　それでもいいなら。
寧　うん。
真思兼　その意味は分かるね。
寧　うん。分かってるつもり。
真思兼　じゃ、始めるよ。
寧　お願い。

真の思兼は、稲穂を一振り。
今まで死んだ人すべてと、生きている人が現れる。
それぞれが、再会を喜びあう。
大きなテーブルと、それを囲むように椅子がセッティングされ、
すべての登場人物がテーブルを囲んで着席する。

寧　みなさん、集まってくれてありがとうございます。私、みなさんと話したいことがあります。私にとって、今、生きている
この時間は耐え難い地獄です。地獄だと思うから辛いのか、それとも本当に地獄なのか、良くしていく方法、マシに感じる

ための考え方、たくさんあると思います。だからといって、無理に手を取り合う必要もないです。自分のことで精一杯になる人もいるから。私と話したことがある人は、私になにができるのか、教えてほしい。私があなたにしてほしいことも、教えます。それから、私と話したことがない人は、一番つらかったこと、一番苦しかったこと、一番うれしかったこと、一番楽しかったことを教えて下さい。一個じゃなくてもいいです。ごめんなさい、今はこういうことしか言えません。頭のいい人は気づいていると思います。多くの人間を変えることはできない。いい人間になる必要もない。壊れた人間は生まれ変わり続けるしかない。でも、強い決意も、悲しい思い出も、人間は忘れていく。だから、私は覚えていようと思う。あなたたちになにが起きたか。なにを考えたのか。（間）今、あなた達に会えて、私はとても嬉しい。

人々は話し始める。

鳥の鳴き声が聞こえて、人々は傘をさす。

たくさんの鳥が落ちてくる。

終わる。

参考文献

鷲田　清一　『濃霧の中の方向感覚』
エリアス・カネッティ　『群衆と権力』岩田　行一訳
『茨木のり子詩集』　谷川俊太郎選
フランス・ドゥ・ヴァール『共感の時代へ』柴田　裕之訳
現代思想　２０１８年7月号　性暴力＝セクハラ　フェミニズムとMeTOO
舞城　王太郎『淵の王』

※ハートブレイカーズの容姿はJohnny Thunders & The Heartbreakers のステージ衣裳を参考に記述した。